大道

第九卷
第五號

明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可
大正元年九月二十日發行（毎月一回二十日發行）

求道第九卷第五號目次

求道

◎明治天皇陛下奉悼
◎恩赦救恤の詔書
◎感恩の栞
◎明治天皇奉悼會
奉悼會講話
同信仰談話會

講話

◎『教行信證』信卷三信釋　第一席　近角常觀
告白
◎我を知るものは唯此の御一人なり　寺田榮之丞

講話

毎日曜午前九時　求道學舍
〔本郷區春日町一番地〕
毎土曜午後二時　第二求道會
〔九段坂佛教倶樂部〕
毎月二日午後七時　第三求道會
〔日本橋區茅場町說教所〕

求道　第九卷第五號

明治天皇陛下奉悼

明治天皇陛下は終に崩御あらせられた。御發病の當時より御大葬の當日に至るまで、上下擧て國民が捧げ奉る至誠は天日を貫き、灑き奉る血涙は地として濕さざるなき次第である。二重橋の畔に群集する赤子が、宮城遙に御受けあそばさるゝ提燈を仰ぎつゝ、御平癒を跂望したてまつりたる甲斐もなく、大漸の御容體は刻々に臣民の心魂を刻みつゝ、終に明治四十五年七月三十日午前零時四十三分崩御登遐遊ばされた。天地は闇に鎖され、世界一點の光を認むるとあたはぬ。恐多きとながら　皇太后陛下を初めたてまつり、宮中に於かせられての御悲哀は如何あらせらるゝであろう。十日間　天皇皇后皇太后三陛下、湯藥自ら嘗めさせられ、晝夜帶を解かせられず、晝夜御看病申上げさせられ、御容體と共に心身摩滅せんばかりの御痛心、恐察し奉るだに實に血涙である。御大葬の當日嘗て日夜奉侍せる侍從の照しまつる松明と共に、靈轜が宮城を出でさせられて、もはや永劫に御還幸なきことを思へば、七千萬の臣民は氣も絶えなんばかりである。號砲一發の下に、純忠直愨の乃木將軍が殉死の刃に伏せられたも、國民の悲哀及び献身的忠誠の極を發現された出來事である。げに『涅槃經』に於ける群生慟哭の有樣は實に七千萬同胞の現狀である。曰く、何ぞ其れ苦なる哉、何ぞ其れ苦なる哉、如何ぞ世尊一旦に四無量心を捨離して、人天所奉の供養を受けたまはず、聖なる慧日の明も今より永く滅し、無上の法船も斯に於て沈沒しなん。嗚呼痛ましき哉、世間大に苦し、手を擧げ、胸を椎ち、悲號啼哭し、支節戰動して、自ら持する能はず、身の諸の毛孔より血を流し地に灑ぐ、と。

謹みて以ゝみるに　明治天皇の御宇は、古今東西の歷史に比較を見出すことの出來ぬ一種の奇蹟である。四十七年といふ永々の御治世といふことが、既に、御歷代に於てすら年代の明確になつてから稀有なことである。況んや維新の大業から、日清日露の戰爭を經て、鎖國孤島の日本が忽にして世界列强と馳騁するに至つた空前の事蹟に於てをや。御踐祚の御詔勅に何を以て列國と對峙せんと宣ひけるに、今日御大葬

に列國の皇室より鄭重慇懃なる特使が參列せられ、空前の盛儀を面り拜し奉るといふは、實に著しき進運である。空氣や光線の中にありて當然であるかの如く思ふて、特に其恩を感ぜざるが如く、明治に生れ、明治に長じたるものゆへに、古の堯の民の如く、帝力何ぞ我に有らんやといふ調子にて、昭代の尊きことを知らざれども、自覺して見れば我等は歴史上空前の地點に立ちつゝあることを見出した。而して其明治が今や過去になつたのである。我等は夫程に尊かりし明治の外に出て仕舞ふたのである。　明治天皇陛下は我等を見捨て、御崩御になつたのである。明治天皇なる御名は先帝陛下の御諡號となつたのである。自ら夢にあらずやと怪むばかりである。夢ならば醒めがしと自ら警め試むる次第である。我等は陛下の御崩御などいふことは思ふても見なかつた。御大葬に遇ひたてまつるなどいふことは夢思はなんだ。而して今や眼前の事實となつた。疑ふこと能はざる現在となつた。『涅槃經』の御説法は昔の事實ではない、いつも言ひ慣れて居る諸行無常、是生滅法の偈が實に天地に響く聲として聞える。まして佛敎常套の語として聞き流してはならぬ、又厭世悲觀の調として耳を蔽ふてはならぬ、又不祥凶惡の文字として呪ふてはならぬ。吾人は　明治天皇の聖德大業を仰ぎたてまつると共に又　陛下が崩御の事實によりて皇國の上下に對して示したまへる森嚴なる御聖訓を眞面目に頂かねばならぬ。『涅槃經』に曰く、一切諸の世間、生ある者は皆死に歸し、壽命無量なりと雖、要す必す盡るあるべし。夫れ盛なれば必ず衰ふるあり、合ひ會ふものは別離あり、壯年久しく停らず、盛なる色は病に侵さる、命は死の爲に呑まる、法として常なる者あることなし、諸王自在を得て、勢力等雙なきも、一切皆遷動す、壽命亦是の如し、衆苦輪際まりなし、流轉すること休息なし、三界は皆無常なり、諸有樂あることなしと。

嗚呼人生として哀痛悲傷の極である。世間として虛假夢幻の相である、煩惱具足火宅無常の有樣である、而して此間に於て永久不變の或物がなければならぬ、生死を超絶して永劫渝らざる光明を見出さねばならぬ。是實に聖德太子の所謂四生之終歸萬國の極宗である。『涅槃經』に如來の色身は滅すと雖法身は滅せず、如來は常住にして變易あることなしと說きたまへるもの是である。『勝鬘經』に所謂、世尊如來は限齊の時あることなくして住す、如來順等正覺は後除と等しく住す、如來に限齊なければ大悲も亦限齊なく、世間を安慰す、無限

の大悲を以て、無限に世間を安慰す。といひ、又曰く、阿耨多羅三藐三菩提は即是涅槃界なり、涅槃界は即是如來の法身なり、究竟法身を得るは究竟の一乘なり、異の如來ましまさず、異の法身ましまさず、如來は即ち是れ法身なり、究竟法身を得るは、則ち究竟一乘なり、究竟一乘は即是無邊不斷なりと。而して實に是れ『行卷』に所謂一乘海にして、大乘は二乘三乘あることなし、二乘三乘は一乘に入らしめんとなり、一乘は即是第一義乘なり、唯是れ誓願一佛乘なり是である。實に是れ聖德太子が日域大乘相應地と告命し、篤敬三寶と宣ひて、何れの世何れの人か此法を貴ぶにあらざらん、人尤も惡しきことなし、克く敎ふれば之に從ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直さんと仰せられたもの、實に洵に是である。盡十方無碍光佛是である、南無阿彌陀佛是れである。

明治天皇の崩御は、精神上深大なる意義を國民に與へたまふものである。帝國の上下を蔽ふたる無明長夜の闇は、此盡十方無碍の光明によらずんば智眼を開くことは出來ぬ。一人々々の身に迫りたる生死大海の流れには、此誓願一佛乘の大船によらずんば彼岸に渡るとが出來ぬ。實に歴史上奇蹟とも仰ぐべき明治時代の結末は、精神上亦偉大なる感化を國民に與へずして止むものではない。宜なる哉たしかに是れ七千萬國民をして信仰的機緣を純熟せしめ、如來常住の光明に遇はしむべく導きたまふ御催にてまします。かくの如く案じ去り案じ來れば恐くば是上下を通じて淨土の機緣純熟の時來りたるものであらう。『敎行信證』の總序に曰く、竊に以みれば難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破するの慧日なり、然れば淨邦緣熟して調達闇世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり、是則ち權化の仁、齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まんと欲すと。嗚呼是れ佛涅槃の當日阿闍世王を救ひ韋提希夫人を度したまひし事實である。而して今や　明治天皇の崩御は國民をして佛涅槃に遇ふが如き感動を與へたる已上は、此際に於て淨土の機緣純熟せねばならぬ樣になつてあるのである。而して我々國民が一人々々自分が阿闍世王であり、韋提希夫人たることを自覺して、此國家大故の時に於て信仰の光明に接せねばならぬ。

『涅槃經』の眼目たる如來常住無有變易の一光明はあらゆる衆生、あらゆる佛弟子に對する御遺訓である。されど佛涅槃に臨みて最も御心を惱ましたてまつりたるは阿難に非ず迦葉に

非ず、乃至梵天帝釋に非ず、最後の佛の一言は我阿闍世王の爲めに涅槃に入らずとある是である。阿闍世とは普く一切五逆を造る者なり、即ち是れ煩惱を具足せる者なり、佛一代說法最後の敎化は、五逆の我等、煩惱具足の我等の爲に、如來常住の光明を說き、本願醍醐の妙藥を與へたまふたのである。親の將に終らんとするに、親は最も沈淪落魄せるの子、不孝無道の兒を憐愍するが如くである。佛も將に入滅したまはんとするに、特に難化の三機難治の三病、即ち五逆、謗法、一闡提のものを哀愍治療したまふのである。今や　明治天皇崩御の時に於て我々國民が慈親の膝下に於て我等が罪惡を懺悔し、初めて無限の大悲に感泣して、眞心徹到して金剛信を獲得せねばならぬ。恰も阿闍世王が懺悔の偈は正に國民の中心に於ける告白であらねばならぬ。曰く、

如來は一切の爲に、常に慈父母と作りたまふ、當に知るべし諸の衆生は、皆是れ如來の子なり、世尊大慈悲、衆の爲めに苦行を修したまふ、人の鬼魅に著せられて、狂亂して所爲多きが如し。我今佛を見たてまつることを得たり、得る所の三業の善、願くば此功德を以て、無上道に廻向せん。我今供養する所の、佛法及び衆僧、願くば此功德を以て、三寶常に世に在さん。我今當に得る所の、種種の諸の功德、願くば此を以て衆生の四種の魔を破壞せん。我惡知識に遇ふて、三世の罪を造作せり、今佛前に於て悔ゆ、願くば後更に造ること莫らん。願くば諸の衆生等、悉く菩提心を發し、心を繫て常に、十方の一切佛を思念せん。復願くば諸の衆生、永く諸の煩惱を破りて、了々に佛性を見ること、猶妙德の如く等しからんと。

是亦恰も實に國民が闕下に伏して懺悔すべき告白である。御病氣を聞て二重橋に趨りて沙上に伏し、御大葬を送りて御靈轜を拜して慟哭するものは、泣血雨涙其罪を懺悔すべきである。他を責むべきては無い自ら責めねばならぬ。他が阿闍世ではない、各自阿闍世王である。七千萬の同胞中一人にても罪あらば是即ち我々同胞の罪である。一葉の落つるは天下の秋である。恐くは　先帝陛下の晩年に於かせられて最も御心を惱ましませしは、恐くは國民の心に吹きすさむ荒凉たる思想であろう。險惡の風潮であろう。此罪を自覺せしむるものは即ち如來常住の光明である、此逆惡を攝取して融化和鎔せしむるものが即ち本願圓頓一乘である。

樹靜かならんと欲して風息まず、子養はんと欲して親在さ

ず。國民が罪惡を自覺して襟宸を安んじたてまつらんとする時は大君既に在さず、若し信仰眼を開くにあらずんば此懺悔を告白すべき所がないであらう。仰て天に訴ふるも天應へず、伏して地に哭するも地默々。唯一信仰の力によりて隔世の遺靈を追ひ奉り、如來常住の光によりて之を　今上陛下の御上に一致を見出すことが出來る。人生は唯南無阿彌陀佛の一佛名によりて天地を極め、無量劫を盡して如何なる所にも貫徹し、如何なる微しきにも遍滿する次第である。かくの如く　先帝陛下の崩御によりて國民が信仰の自覺を促し、如來常住の光に催されて眞個に罪惡を懺悔するとが出來たならば、直に是れ　今上陛下へ事へたてまつる道を見出すことが出來る。大正の御代は實に此信仰的自覺の輝くの時運に膺らせらるゝであろう。否かくあらなければならぬ。伏して惟みるに、明治天皇御踐祚の時、國勢上列國對峙のことを憂へさせられて終に今日の盛運を實現したまひし如く、大正の御宇は思想界の問題に於て信仰自覺の曙光あらはれて、古來蘊蓄せられたる我國精神上の光明が八紘に光被する時代を實現したまふであらう。かくてこそ日域大乘相應地てゝ聖德太子の理想が世界に輝くであろう。近頃列國が環視して我國に待ち設けつゝあるは實に此點であろう。　明治天皇陛下の崩御が我帝國上下を通じて此光明を仰がしむべく大なる御催促であるとを深く信ずる次第である。あはれ庶幾くば七千萬の同胞此信仰的自覺を得て、同一念佛、先帝遺靈の下に懺悔と感謝とを捧げたきものである。是眞に　明治天皇陛下を奉悼し奉る所以の道にして、必ず冥々の間に嘉納在ますであろう。南無阿彌陀佛

恩赦救恤の詔勅

九月十三日御大葬の日、恩赦の詔書を煥發せられ、又內帑金一百萬圓を救恤したまひ左の詔勅を賜ふた。

詔書

朕遽ニ大故ニ遭ヒ哀矜已マス前典ヲ繹ネテ惠澤ヲ遠邇ニ洽カラシメ以テ朕カ罔極ノ哀ヲ申ヘムコトヲ念ヒ特ニ有司ニ命シテ恩赦ヲ行ハムトス百僚有衆其レ朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

大正元年九月十三日

各大臣副署

勅語

朕大喪ニ丁リ特ニ命シテ內帑ノ金ヲ出シ各地方ニ頒賜シテ以テ慈惠救濟ノ資ニ充テシム

實に廣大無邊天覆ふ仁德の恩澤である。先帝陛下の御詠に、

あさみどりすみ渡りたる大ぞらの
ひろきをおのが心ともがな

我心いたらぬ隈もなくもがな
此世をてらす月のごとくに

の御思召を民草の上に潤ほさせたまはるのである、實に恩赦の御趣意は善人なほもて往生を遂く況んや惡人をやの思召にて、特に罪惡深重煩惱熾盛の衆生を憐愍したまふ大御心の煥發である、實に尊き詔書にてまします。こは罪囚の上に賜はれる詔書として、永劫に優渥なる聖旨を感佩せねばならぬ。而して如何なる逆惡のものも皇恩の無邊なるに感激して中心懺悔の心を起し、改悛の實を擧げねばならぬ。而して當局有司は此隈なき大御心の洽く罪囚に普及するやうに聖意を奉體して施行せねばならぬ、又宗教家は罪惡救濟の大慈大悲の聖慮の徹底を他迄期せねばならぬ。又慈惠救濟の思召に至りては、恩賜を物質的慈惠肉體的救濟に止めずして、天恩の優渥なるを信仰的慈惠、精神的救濟にまで貫徹せしめねばならぬ。吾人は嘗て聖德太子の理想が勝鬘經にあることを聞いた。太子自ら名て佛子勝鬘と號せられた。抑々勝鬘夫人は波斯匿王の女にして、佛前に於て其信ずる所の大乘を獅子吼せられたのが勝鬘經である。私かに思ふに聖德太子が推古女帝の前に屢々之を講說せられたも良に以ある事である。其勝鬘夫人の理想たる十大受三大願は實に左の如くである。

爾時勝鬘聞受記已恭敬而立受十大受。

世尊我從今日乃至菩提於所受戒不起犯心。
世尊我從今日乃至菩提於諸尊長不起慢心。
世尊我從今日乃至菩提於諸衆生不起悪心。
世尊我從今日乃至菩提於他身色及外衆具不起嫉心。
世尊我從今日乃至菩提於內外法不起慳心。
世尊我從今日乃至菩提不自爲己受畜財物、凡有所受悉爲成熟貧苦衆生。
世尊我從今日乃至菩提不自爲己行四攝法爲一切衆生故、以無愛染心無厭足心無悪礙心攝受衆生。
世尊我從今日乃至菩提若見孤獨幽擊疾病種々厄難困苦衆生終不暫捨必欲安隱以義饒益令脫衆苦然後乃捨。
世尊我從今日乃至菩提若見捕養衆惡律儀及諸犯戒終不棄捨我得力時於彼彼處見此衆生應折伏者而折伏之應攝受者攝受之何以故以折伏攝受故令法久住法久住者天人充滿惡道減少能於如來所轉法輪而得隨轉見是利故救攝不捨。
世尊我從今日乃至菩提攝受正法終不忘失何以故忘失法者則忘大乘忘大乘者則忘波羅密忘波羅密者則不欲大乘若菩薩不決定大乘者則不能得攝正法欲隨所樂入永不堪任越凡夫地我見如是無量大過又見未來攝受正法菩薩摩阿薩無量福利故受此大受。
（中略）爾時勝鬘復於佛前發三大願而作是言以此實願安慰無邊衆生。
以此善根於一切生得正法智是名第一大願。
我得正法智已以無厭心爲衆生說是名第二大願。
我於攝受正法捨身命財護持正法是名第三大願。
庶幾くば之を以て大正の仁政の理想として、聖德太子の信仰と經營とを世界的に實現せられんことを。

感恩の栞

本篇は本所區若宮町三十八なる無料宿泊所、及び深川區西町四一一なる第二無料宿泊所より、今回の御大葬三日間中に、濟生會に受療の爲め來る人々に對し、御報恩の爲め藥劑券を施與せらるゝに際し、特に法施として添付頒布せられるものにて、近角の執筆にかゝる。無料宿泊所は故大草師の遺業也。

一

恐多くも
明治天皇陛下御大喪といふ思ひ掛けもなき悲哀極る御日柄になりました、我々七千萬の臣民は仁慈至極の大御親と分かれ奉りて、もはや此世に於て天顏を拜し奉ることが出來ませぬ、津々浦々に至るまで一齋に響き渡る寺々の哀鐘とともに、同心一體ひたすら哀悼感恩の涙を注ぐばかりであります、私かに承るに、陛下御踐祚の御詔勅に
朕幼弱を以て猝に大統を繼ぎ、爾來何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪へさる也（中略）今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざるときは皆朕が罪なれば今日の事朕自ら身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古へ列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ始て天職を奉じて億兆の君たるに背かざるべし。
と宣らせられた大御心は四十七年の永き御治世に於て、實現あらせられ、今日の御大喪に列國各皇室より御丁重なる御名代が態々御參列相成るといふは全く　陛下御稜威の然らしむる所と仰ぎ奉るより外はありません、かくまでも　陛下御言の如く自ら身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立ちたまへる根本は、天下億兆一人も其處を得ざるときは皆朕が罪なればとの大御心一つより外はありませぬ、私は七千萬の臣民が此大御心を拜戴して、天下億兆一人もと仰せられたは他人の事でない、私一人の事であると感佩せねばならぬ、たしかに私共一人々々の身を常に案じさせたまひ、御崩御に至るまで朕の罪なりとて御苦勞下された、かくまでの大御心に對して御同樣に十分に御心を安んじ奉ることが出來たか、心殘りなく天恩に奉答することが出來たか、私共一人々々實に四十七年の御苦勞は私一人のためなりと、中心の罪を懺悔して　陛下の遺靈に對し奉りて感恩の誠を捧げねばならぬ、必ずや冥々の間御嘉納あらせらるゝ事疑ありませぬ。

二

陛下御治世の間何事も皆此大御心より出てさせられぬこと

はない、然れども殊に晩年に至らせられて恩賜金を基として出來た濟生會の如きは、著しく此大御心の發現であることを感ぜねばならぬ、我々同胞の間に病氣でありながら十分に治療することが出來ぬものがあつたり、藥を飲むことが出來ぬものがありてはこれ朕の罪なりと、我々一人々々を一子の如く思召さるゝ大御心より賜はる次第なれば、一瓶の藥も滴々皇恩と頂かねばならぬ、涅槃經の言に『譬へば一人にして七子あらんに是七子の中病に遇へば、父母の心平等ならざるには非れども、然も病子に於て心則ち偏へに重きが如し、如來も亦爾なり、諸の衆生に於て平等ならざるに非れども、然も罪ある者に於て心則ち偏へに重し』と、私に察するに、聖德太子が施藥院、療病院、悲田院、敬田院を建て、慈惠救濟の御仁慈を垂れさせられしより、歷代之を御再興ありしが、今亦其精神を明治の御代に復興あらせられたことゝ信じ奉る、其聖德太子の御精神は、最も信奉して推古天皇の御前にて講說あらせられた勝鬘經の中に、信仰深き勝鬘夫人といふ皇女が十大受とて十箇の理想を述べたる中の第八に

世尊我從二今日一乃至二菩提一若見二孤獨幽繫疾病種種厄難困苦衆生一終不二暫捨一必欲二安隱一以レ義饒益令レ脫二衆苦一然後乃捨

此の如く深き〳〵源より流れ來りて　陛下の思召となりて實現あられせらたることなれば、形已上の精神的恩澤の優渥なるを感佩せられんことを願ひます、此の如く精神的に感恩の情溢るゝときは、不思議にも病氣も平癒し易く藥も著しく效驗があるものです、是は自然の德であります。

三

折角尊き御藥を頂戴しながら、衞養が不良なるときは身體にふさはぬことがあります、そこで甚だ不十分ながら御大喪三日間濟生會へ御出になる方々に滋養劵を進呈して　陛下恩賜の療治を皆樣の御身體に貫徹する樣にして、せめては　陛下の大御心を拜戴する感恩の微志を表したいと思ひます、何事も皆御思召より流れ出たるものと御受下されて一度なりとも滋養分を上りて下されたい、ところが前にも申す通り、形ばかりの滋養分だけでは皆樣に皇恩を貫徹するには不十分なるゆへ、精神的に徹底して受けていたゞくために此一枚摺を沿へた次第であります、即ち已上申述べたる中に、自分の罪の深いといふ自覺と、其罪深きものをよくも〳〵見捨てずして惠みたまふ御恩の深きことを感ずる心が起るでありませう、是が即ち信仰の中心であります、皆樣が濟生會に於て肉體的に

救濟を受けらるゝと共に精神的に信仰を受けられたならば身心共に天恩の仁慈を感じ、靈肉共に救はるゝ幸福を享けらるゝでありましよう。

四

『歎異鈔』にあらはれたる信仰の極意の文を味て頂きたい。

聖人のつねのおほせには彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懷さふらひしことをいまゝた案ずるに、善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかたつねにしづみ、つねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言にすこしもたがはせおはしまさず、さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり、まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひともよしあしといふことをのみまうしあへり、聖人のおほせには善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり、そのゆゑは、如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。

五

人間は得意の時は自分を善しと思ふて罪惡の深きことを自覺せず、失意のときは自分は駄目なりと煩悶して、いかなる罪惡のものをも見捨てたまはぬ御慈悲のましますことを知らぬのである、しかるに彌陀の本願といふは其罪惡の深きものほど一層可愛相と思召し、苦惱多きものほど猶憐れみたまひ、貧窮なるもの、無智なるもの、下劣なるもの、不具なるものほど益々慈悲がいやまさるのである、若しこれを聞き違へて罪惡を犯してもよいといふことに思ふてはならぬ、親にして小供が道樂してもよい不具でもよいと思ふものがあるか、さればとて然らば我等は罪惡を犯さぬ立派な孝行者であると思ふてはならぬ、何となれば事實爲してならぬ道樂を爲して居るではないか、實際不具に生れづきて居るではないか、そこで其

道樂者が忘れられぬ、不具な小供ほど可愛さがまさるが親心である、かくまで深き親心を聞かして貰ふて見れば、いかなる道樂ものも心を翻して懺悔し、不具なるものも、親心一つて滿足して日送りをすることが出來る、彌陀の本願は實に此の親心である、此の親心は如何なる衆生と雖、此の慈悲を徹底せしめねば止まぬといふ誓である、念力である、昔不孝な子ありて老いたる親を嬉捨山に捨てに往きた、しかるに親は破れ籠の中より枝を折りて道しるべを爲しつゝあつた、子は親が歸るための道しるべと思ひて跡から破壞して、剩へ廻り道をして終に嬉捨山に到着して、親を捨て歸らんとしたるとき親は子に告げて言ふには、我は是にて命終るのである、唯汝の行末が氣にかゝる、汝の歸る路しるべをして置きたるゆへに踐み間違へぬやうにせよと親心を知らされた、此一言の下に如何な不孝の子も俄に頭を下げて、かほどまでの御心とは知らなんだと、我身の罪惡を懺悔して無限の大慈悲に感泣した、是即ち親心の徹底したる信仰の一念である、『奥山に枝折〳〵は誰がためぞ、親の身捨てゝかへる子の爲』此親心か彌陀の本願である、道しるべが南無阿彌陀佛の念佛である、そこて初めて、『彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親戀一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ』の信仰を得ることが出來るのである。

六

信仰といふものは、たとへば藥を飲みて舌の熱の去つたやうなものである、初めて正しき味を味ふことが出來るやうになる、即ち自分の罪惡を自覺して感恩の念油然として起るものである、陛下四十七年の御治世も恩賜濟生の御思召も、私一人の爲といたゞくことが出來るのである、信仰の一念に天恩國恩の深き大御心が徹底して粉骨碎身中心より懺悔して滿腔の感謝を捧げ奉るのである、親戀聖人が朝家の御爲國民の爲念佛すべしと申されたは、實に此報恩謝德の念佛である、聖德太子の御遺訓に世間虛假、惟佛是眞と、明治天皇陛下の御治世も人間として無常の風を免れさせらるゝとかなはず、畏多きとながら、我々赤子の情として宮中の御哀痛如何ばかりと恐察し奉る、又億兆一人も其處を得るやうにとて、我々に救療施藥を下し賜ふ　陛下の御身も、天壽を全ふせられたる已上は四大の御身を捨てさせられねばならぬ、併如來常住の盡十方無碍の光明と一味となりたまひて、我等を永刼に照し

たまふことを仰ぎ奉るより外はない。『煩惱の具足の凡夫、火宅無常の世界はすべてのとみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきにたゞ念佛のみぞまことにておはします』今はたゞ稱名念佛して御遺靈の御照鑒をかしこみ、先帝陛下に事へ奉るの道を以て今上天皇陛下に事へ奉りて、身を捨て命を捧げ天恩の萬一に報效することを誓ひ奉る。南無阿彌陀佛。

安樂集云、據諸部大乘明說聽方軌者、大集經云、於說法者作醫王想、作拔苦想、所說之法、作甘露想、作醍醐想、其聽法者、作增長勝解想、作愈病想、若能如是說者聽者皆堪紹隆佛法、常生佛前、

明治天皇奉悼會

講話

上

此の度びは、誠に畏多き出來事となり、御同樣口にも言葉にも申しやうの無いことであります。既に、御病中より講話の度毎に申し上げたのではありますが、人生の當てにならぬ事は、只今拜讀の『御文』の初めに在る　後鳥羽院の無常講式の御文の如く、

夫、人間の浮生なる相をつら〳〵觀ずるに、おほよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。云々

斯く迄全國の人々が、何うかして〳〵と、御壽命の留まらせらるゝやう、赤誠を傾けて、色々致したにも係はらず、人力では何とも致方なく、遂に此度びの　御大喪に遇ひ奉るに至つたのであります。就きて既に　御病中より種々の考が往來して居た事でありますが、殊に　御崩御に遇ひ奉り、殆んど有らゆる事柄が一時に集つて、一々言語には申し表はせぬ事であります。去りながら御同樣に、斯くの如きいつ知れぬ無常の人生なる事を知らせて頂き、永刼の安心をばせさせて貰ふ此の廣大の御慈悲を頂かせて貰ふて居る上は、此の御信心

の上より、此の度の　御病氣及び　御崩御につき、頂かせ貰ふ處を、少時お話致さうと思ひます。

既に　御病中より申し上げ居ります如く、實に四十七年の長の御治世、其間　先帝陛下には一方ならざる御苦勞を爲し下され、其の廣大の御高恩は、言葉にも心にも思ひ計られぬことであります。其の非常なる御高恩を受けながら、人ごとならず、第一私自身に振り反り見て、其の廣大の御恩德に對し、何等の御奉公申上る事も出來ず、又此の長の　御治世に對し、充分に　陛下の御宸襟を安め奉る具合に、我々自身の行ひが出來たかと言ふに、此點實に慚愧至極なのであります。親の死に目に子供が一代の不孝を今更恨むが如く、實に長々の間御心配を懸け奉り、一日の御心安め奉る日も無く、之れは實に私自身が惡うムりましたと、親の枕頭に謝り果てゝ、今更廣大なる御厚恩に感泣すると、同樣の思ひであります。殊に此の度びの　御大喪により、此頃頻々と傳へらるゝ、西洋各國の新聞又は議會に於ける演說等に顯はるゝ反響の著しき樣を見るにつけても、今更我々此の仕合せなる　大御代に生れ、此の千古類ひ無き聖代に遇ひ奉りながら、夫程の御高恩とも思はず、うか〳〵過ぎ來りし事の、實に御同樣申譯無く存ずる次第であります。

之は度び〳〵申すことではありますが、私が昨年の正月町を通つて居りますと、店先きに明治の初年、即ち御卽位時の　御勅語の寫しが有るを發見し、之を持ち歸り拜讀して見ますると、實に畏れながら

朕幼弱の身を以て猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らむやと朝夕恐懼に堪ざる也。竊に考ふるに、中葉朝政衰へてより武家權を專らにし、表は朝廷を推尊して實は敬して是を遠け、億兆の父母として絕て赤子の情を知ること能はざるより計りなし。遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果て、其爲に今日朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて、朝威は倍々衰へ、上下相離るゝこと宵壤の如し、かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せむや。今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざるときは皆

朕が罪なれば今日の事　朕自ら身骨を勞し、心志を苦しめ艱難の先に立ち、古へ　列聖の盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ始て　天職を奉じて億兆の君たるに背かざるべし。往昔　列祖萬機を親らし、不臣のものあれば、自ら將として是を征し給ひ、朝廷の政總て簡易にして此如く尊重ならざる故、君臣相親みて上下相愛し、德澤天下に洽ねく、國威海外に輝きしなり。然るに近來宇內大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我邦のみ世界の形勢にうとく、舊習を固守し、一新の効をはからず、朕徒らに九重の中に安居し一日の安きを偸み、百年の憂を忘るゝときは遂に各國の凌侮を受け、上は　列聖を辱め奉り、下は億兆を苦めんことを恐る、故に　朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ

列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す。億兆舊來の陋習に慣れ、尊重のみを　朝廷のことゝなし、神洲の危急を知らず　朕一たび足を擧ぐれば非常に驚

き、疑惑を生じ、萬口紛紜として　朕が志をなさざらしむるときは是　朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從て　列祖の天下を失はしむるもの也。汝億兆能々　朕が志を體認し相率ゐて私見を去り、公義を採り、朕が業を助け

神洲を保全し　列聖の神靈を慰し奉らしめば生前の幸甚ならむ(已上)

私は讀みて「億兆一人も其處を得ざるときは、皆朕が罪なれば云々」の御言葉に至つた時、實に胸を突かれたやうに感じた事であります。「億兆の間に、一人にても其の處を得ざる者ある時は、一に之れ　朕が罪である、澤山なる人民の間に、一人にても其の所を得ぬ者が有る時は、其の者の惡しきで無い、朕が至らぬからである」と、御仰せ出し下されたのである。私は之れを拜讀し奉り、あゝ實に明治維新の大業を御成就なし下された　御精神は、實に之れであると、此の時深く

大御心の程を頂き、爾來此の一語が常に私の胸を離れぬのであります。で何か國に事有る毎に、「陛下は斯くの如く遣る瀨無く思召し下されてあるに、我々臣民は之れを何んと拜聽して居るのであるか、之は人の事に仕て居るで無い、世の中に何から何迄　御叡慮を惱まし奉るやうの事出來て來るは、皆各自一人々々の罪なる事を、氣をつけさせて貰は無くてはならぬ事である」と、常に思うて居りました事であります。故に此の度び　御病氣と承はり、第一に私の感じましたことは、あゝ長々御心配を懸け、御心を惱まし奉り、實に畏れ入る事であつた、　陛下の御稜威により、日本も漸次盛んにはなつて來たが、夫れと共に凡ての人に充分確かなる心が出來て有るか何うか。日本の將來東洋の前途など考へると、欲を言へば切り無けれども、せめて御卽位五十年の紀念の大典をも擧げさせられ、金婚の御祝儀をも行はせられ、東洋の天地も眞の平和となり、世界法治國の中心と仰がれさせ給ふ迄と——

——之は私は吾が　陛下の御宏業は、日本は勿論の事、廣く世界的に御成就下されるものと、深く信じて居りました事故實に今更の如く殘念でたまら無かつたのであります。併しながらこは如何程言ひ、如何程繰反すも及ばぬ事である。既に斯く高貴の御身にも、人體をからせ給へば、無常の已を得ぬ事をお示し下された上は、先き程いふ『御文』の續きにも

たれか百年の形體をたもつべきや、我やさき人やさき、けふともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すゑの露よりもしげし、といへり。

去りながら、茲の處で、唯此の無常の世である事をのみ泣き悲むでは無い。既に　陛下崩れさせ給ひ、我等を知し召し下されざるを悲むのみでは、世はとこ暗みになる計りであるも、茲でこそ此の聖代の御かげで常に承はる信仰の力、佛のみ惠みを頂かせて貰はねばならぬのである。斯る當てにならぬ無常の世なればこそ、夫れを哀れみ、其の者を捨てさせ給はぬが、佛の本願南無阿彌陀佛の思召にて、此の當てにならぬ無常の世なる處に、此の遺る瀨無き思召を、頂かせて貰はねばならぬのであります。

中

事餘りに細かくなり、斯る席にて申上ぐるは、場所柄を得

ぬ嫌ひはありますも、折角皆様斯くお集り下された事故、茲て一つ信心の要點丈けは聞いて頂かねばならぬのであります。兩三日前の事でありますが、兼ねて私が眞宗大學で敎へた事のある人て、　陛下の御發病と同時に、矢張り心臟の疾患を起し、目下危篤の病床に在る方があります。其の方を其の方の諸親友が相集り、安心の上にも猶ほ安心させ度いと、私をお招きになつたのであります。其處て其友人の方より御樣子を承はると、多年學問上に於ても事を共にし、又宗門の上に於ても事を共にして來た友人達が訪ねると、其の方も泣き友人も泣き互に涙を絞り合つて、爲めに却つて病ひを重らして困る、とのお話でありました。それて私が參り、病床に顏を出すと私も長々お敎を致して居りた間柄てあり、矢張り感慨極つて涙を流して泣かれるのてあります。私は此の時思はず、「君、しばらく待ち給へ、信仰といふ事は、徒らに泣き、感慨をする事ては無い」と、先づ言葉て押へて措いて、「成る程君は今斯く病床に在り感慨に迫るも最もてあるが、併しながら人間なれば、斯く言つて居る私が、いつ何時、今即刻死ぬかも知れぬ。人間は健全なりとて誇ることも出來ねば、病氣だからとて必しも歎くには當らぬのである。夫よりも今茲に、明に斯く生死の淵に苦しんて居る我々の有樣を御覽じて、夫れが可哀相故、其者を救ふと呼んて下さる、遣る瀨無き思召がましますと、聞いて居るのでは無いか。之を承れば人間は健康だからとて當てになるのてもなく、又病氣て心淋しくあらうか、何うあらうが乃至生きやうが死なうが、此のお慈悲を承はれば、之れ程安心な事は無いのでは無いが。今現に君が此の病床て養生をして居られる、此の病床を其の遺る瀨無きお光明が照らして居て下されるのてある。

煩惱にまなこさへられて、　攝取の光明見ざれども、

大悲ものうきことなくて、　つねに吾が身をてらすなり

實に、今病氣て惱んて居られる此の病床が斯く遺る瀨無きお慈悲の中に照らされて居るといふ、茲が直に安心の仕どころてある。我々が自分て自分の罪を歎いたり、自分て有り難がつたりして居るのては何もならぬが、設ひ生きやうと死なうと、斯く待ち兼ね給はる廣大の親の呼び聲が、向うより來て下さるのては無いか、彌々此世が當てにならぬとなつて見れば、もう茲て此の遺る瀨無き仰せを、信ずるより外に仕樣が無いて無いか」と、お話したのてあります。すると其方も今迄の涙を收めて、「あゝ實に有り難い」と言はれる。「私ももう其處を頂かせて貰うばかりてある」と言はれて、手を合はされ、大分安らかになられたやうてありましたから、私もお分れして歸らうとすると、其方の友人達が心配してあちこちに集まつてひそ〳〵話して居られる。私も少し氣になりたから、其方達にお願ひして、安心せられたか何うか、一寸樣子を聞いて頂く事にした。すると其のお返事に「今迄何うしても寢なんだのが只今はすや〳〵寢て居る」とのお話しに、私も安心して、門を出づるなり、大夕立に遇ひ此の雨に何うか病氣に障らねばと案じ〳〵歸つて來たやうな事てあります。て今朝も病院にお訪ねすると、勿論醫藥の効も有つたのてせうが、昨日以來具合が良いとの御話て、「今迄は亡くなつて親兄弟の事など思ひあゝも仕度い斯うも仕度いと苦しみましたが、大變心

が樂になりました」と言はれる。私も「實に然うてある、我々何の仕樣も無い者を助けるとの廣大の佛の仰てある。其仕樣の無い者が、亡くなつた兄弟の事が何うてあるの、親が亡くなつたから何う仕無ければならぬなど考へたつて、何になる。爾るに此の廣大のお慈悲を聞かせて貰うと、此の仕樣の無い私目がけてお呼び下さる、此のお慈悲一つを目當に安心させて貰ふのてある。既に自分自身が此の廣大の惡みの中に置いて頂くのてある。況して親兄弟が如何にあらうが、之を私の方から心配することは無い。我が力は及ばねども親は我ばかりの親に非ず、遺る瀨無きお慈悲は、又同樣に親兄弟の上に及んてゝ下さるのてある。『歎異鈔』のお示しには

親鸞は父母の孝養のためとて、念佛一遍にても、まうしたること、いまださふらはず……たゞ自刀をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもてまづ有緣を度すべきなり。

斯く頂かせ貰うと、病中でも心安らかに居らせて貰へるのてある」と、申して歸つて來たことてあります。茲は御信心のごく肝心の處故、茲一ヶ所は、如何なる人にも聞いて貰はねばならぬのてあります。

此度び思ひがけ無き　御崩御に遇ひ奉りたに就けても前申すが如く人生上より種々の希望を申述べ、あゝ夫れが今は空しくなつて仕舞うたと悲むは、此の人生の上丈けなら夫れて宜しいのてありますも、此のお慈悲を頂き、其お慈悲の下に我身の淺間しき事を謝り果てる上より言ふ時は、　陛下四十七年の　御高恩は、何も四十七年と限りのつく　御高恩ては無いのてあります。此の信心を頂き、永劫の安心をさせて貰うた上より言ふ時は、　陛下御在世の間、其の廣大の御高恩を頂き喜はせて貰ふて居る者は、萬々歳の末迄も、其の御恩德を頂く事が出來るのてあります。成る程既に　御崩御あらせられたのてありますも、猶ほ　御在生ましますと同じやう、大行天皇に仕へ奉ると同じやうに、　今上陛下に仕へ奉る心は、茲から出て來るのてあります。

茲は實に大事の處て、信仰といふ事は、世間の事と離れてあるに非ず、我が身は惡しき徒ら者と知れたといふが茲てあります。此の陛下の御高恩に對し奉り、自分は眞に足らはぬ者、申譯無き者と分らせて貰ふ處が無くてはならぬ。其分からせて貰ふといふが、此の佛の御恩が分ると、夫れが分らせて貰へるのてあります。佛の御恩が分ると　陛下四十七年の長の御苦勞も、實に私一人の爲めの御苦勞てある。「彌陀の五劫思惟の願をなく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人の爲めなりけり」の味ひが、　陛下の御恩の上にも、頂けて來なくちやならぬのてあります。此の廣大の佛の思召が頂けると、實に私一人が爲めに、日淸日露の戰役も爲し下されたのてある。皆んな並みにして下されたのてはない、私一人にても其の所を得ざること無からしめんが爲に、　大御心を惱まし給はりたのてある。又私一人が惡しき爲めに、長々御心配を懸け奉りたのてある。これが皆な御信心の上より、現はれて來るのてあります。

下

さて又世間の上より申して、全國の人々が斯く迄赤心を込めて祈りたにも係はらず、祈り甲斐もなく遂に明治の御世も永久に去つて仕舞うた、と悔むは、信仰の無い人の言ふ事であります。成る程世は代はり、元號は改まれども、廣大なる佛のお慈悲の下に、天恩の深重なる事を頂かして貰ふて居れば、大行天皇の洪恩は、やがて　今上陛下の御高恩なる事が此の信仰上より頂け來るのであります。之れは常に申す如く此の世間の上に大なる佛の光が現はれ、直接私共を導き下さるので、其の現はれ出で下さる大もとは、只今頂く御教化の如く、

智慧の光明はかりなし、　有量の諸相ことゝく、
光曉かふらぬものはなし、　眞實明に歸命せよ。
清淨光明ならびなし、　遇斯光のゆへなれば、
一切の業繫ものそこりぬ、　畢竟依を歸命せよ。
佛光照曜最第一、　光炎王佛となづけたり、
三塗の黑闇ひらくなり、　大應供を歸命せよ。

此の佛の清淨歡喜智慧のお光りより、現はれ出で下さるのである。之等は一々申す迄もなく、皆樣の既に直接感じて喜んて居らるゝ處であります。

猶ほ又世間の上より申して、斯く尊き御身にも、遂に人生をお去り下されたのでありますが、我々信仰上より　天皇陛下の御一代を如何に頂くかといふ事であります。之に就き四五年前の事でありますが、蒙古の喇嘛僧が日本に來た事がありまして、夫れが私に話すには、「日本の　天皇陛下は唯人にましまさぬ、日本の　陛下は諸方に於ける、邪まなる者を摧き、正しきものを興す爲め、佛が日本に現はれ給ひたお姿である」と、其の喇嘛僧は非常に信仰深き仁でありまして、其如何にも深く信じて斯く言うた信仰の尊さに、私も深く感じた事でありましたが、之を先日來ふと思ひ出し、之れは確かに個人が自覺すると同じやうに、世界を自覺の方向に御導き下さる爲めに、現はれ下されしお姿なる事を言ひ當てし言であると、深く感じて居る事であります。人間は横着て、御在世の時は親しさに慣れて、御高恩を思はず、平日は承知しながらも、うか〳〵暮して居るのでありますも、彌々　御崩御と承はり、振反り見るに實に四十七年の比類無き長の御治世、其の間實に比類無き大變化があつたのである。而して之には眼には見えぬも、其の裏の方には非常なる精神上の遷り代はりがあるので、之れが結局何うなるのであるか。長い間我が日本は昇平に慣れて、此の自覺の問題の上には無意識になつて來たのでありますも、日清日露の二大戰役を經て、漸次我が日本國民も自覺の方角に向ふ事となり、夫れが知らず識らずの間に、世界に現はるる長い道行きてあると、信ぜさせて頂く事であります。されば其の大なる事柄の中心となり下されたる　陛下なれば、實に唯人てましまさぬと、深く感ずる次第であります。されば　先帝陛下には、我々の頂く御教化が、漸次世界に行き渡る廣大の御手引きを爲し下されたものである。『和讃』には

聖德皇のおあはれみに、　護持養育たえずして、

如來二種の廻向に、　すゝめいれしめおはします。

親鸞聖人が斯く『聖德皇太子奉讃』にお示し下されたる如く、實に吾が　陛下には、今帝陛下の大御代に於て、此の二種廻向の廣大なる信心が、世界に現はるゝやう御導き下されたる御方にてまします。されば我々此の大御代に於て信心を頂き安心をさせて貰ふは、實に此の上も無き仕合せにて、世間一般として御大恩に報ゐなければならぬは勿論の事、我々此の御信心を頂き、永劫の安心をさせて頂く上は、此の御大恩を重ね〳〵頂きたる身なることを思ひ、此の爲には、身を粉にし、骨を碎きても御報謝しなければならぬのであります。親の死に目に子供は親の恩を感じて、今迄如何に不法懈怠に過して居た者も、何うか草葉の陰にて見て居て下さい、御在世に御心配をかけまつたことは、必ず實際に實行致します、との心は必ず子供に在る可き心である。夫れと同じやうに、御同樣此の　御大喪に遇ひ奉り、勿論身を地に投げて號泣する事でありますも、夫と共に此當てにならぬ世の中に、彌々お見捨て無き、此裏の方の廣大なるお慈悲を頂き其の上より　今上陛下に仕へ奉る事、　大行天皇に仕へ奉ると信仰上同一なる味ひを頂かせて頂き、　大行陛下御在世に仕へ奉る能はざりし處を、今帝陛下の大御代に、力の限り御報謝させて頂き度いと思ふ事であります。斯く申すも、別に變りたる事あるに非ず、各自眞に御報謝させて頂く事は、此の眞のお慈悲の上からでなければ、出來ぬことを申し上げたのである。御同樣に此の眞のお慈悲を頂きたる上より、各自其の所に從つて盡させて頂き度いと思ふ事であります。設へば一つの軍艦を動かすにしても、兵も入れば卒も入り、將も入れば、機關士も入る。何に從事して居るとも、皆じ同じである。各自皆同樣に各其の處に從つて此の眞のお慈悲の上より此の廣大なる御皇恩の寫め、働かせて頂き度き事であります(已上)

信仰談話會

今日は形ばかりの　奉悼會を營ませて頂き、皆樣御來會下され難有く存じます。就きては今日はいつもの談話會とは違ひ此度びの　御崩御に就き、信仰上の御所感なり、御感話なりを承り度く存じます。殊に私は、此際　先帝陛下の御聖德に就き、逸事と申しては畏れ多いのでありますけれども、新聞紙に現はれたる以外に、皆樣何かお聞き込みの事もあらば夫を聞きかせて頂き、　御聖德を仰ぎ奉る事に致し度いと思ふのであります。

此の時一座哩然たり。即ち荻野仲三郎氏に感話を乞ふ。

荻野仲三郎氏談話

夫れでは私より始めようと思ひます。私は平日歷史の事を調べて居りますもの故、歷史上より考へますと、此の　明治の大御代程、日本に著しき時代は今日迄には見る事が出來ぬのであります。又今度の大行天皇の如く、　御在位の長かつた事も、ずつと以前に、允恭天皇がありますが、其の後に於ては、四十七年の御在位は無いのであります。最も　允恭天皇迄は歷史が確つかりして居りませぬ故、長かつたには違ひませ

ぬも、後ちより言ふ事故、確な事は申されませぬ。先づ歴史上より申しますと、丁度聖德太子の頃より歴史が確つかり仕て來ましたので、夫より言ふと、大抵の　天皇の御在位は二十年前後夫れより多き事は少くないので、此度の　陛下の如く御在位の長かつた事は、今迄には無いのであります。殊に領土の上より申しますれば、御即位の時は丁度今日の半分、今日の如く、臺灣、樺太と廣がり、殊に朝鮮併合の只今にては、丁度倍丈けに多くなつて居るのであります。即ち四十七年の御在位の間に、之丈けの事を仕て下されたのにて、之は日本に於てのみならず、世界の歴史上、隨分大事業を遂げられた大帝、大王と言はるゝ方はありますが、之等は何れも其國〳〵に於ては大切なる方ではありますも、夫れは皆な野心政略の上よりせられたのでありますが、我が　明治天皇に於ては、更に一點の私心を雜へて、事を爲し下されたといふ事は無い。只今の御話にもありた如く「億兆一人にても其の處を得ざる者ある時は之れ朕が罪なり」と宣はせられ、又時々の御咏にも、民安かれ國安かれ、とばかり思召し下されてあつて、外の事は一つも雜へてお出で下されぬのであります。又御健康上御即位後は避暑避寒の爲め御旅行あらせたり、御轉地あらせたといふ事は唯の一度も無いのでありまして、箱根の離宮は隨分凉しい處と承りて居りますも、之にも一回もお出かけあらせた事が無い。民間では避暑避寒と騒いで居るのでありますも、　帝には此の宮城外一歩も其の爲めに、お出かけ下された事が無い、といふ事は、世界帝王中に他に類の無いのは勿論、日本でも多少地位ある者は皆な仕て居りますのに

上御一人は斯くの如く仕て下されたといふ事は、之れ程有難い事は無いと、思ふのであります。で私共、先輩より聞き又　御陪食の席に列なつた人々より承る處も、いつも中心臣下の事を思召し、御言葉を下さると言ふ話ばかりでありまして。其の事は新聞の上にも大抵は出て居り、皆さんも既に御承知の事とは思ひまするも、私の聞く近頃の一つを申し上げて見ようと思ひます。之はごく近き頃の御陪食の折りの　御話と承るのでありますが、いつの頃でありますか、明治初年に鹿兒島に　御幸の事がありまして、其の時は老西郷がお伴致し、又村田新八がおつきになつてついて行つた。此の時は軍艦に召されてお出でになつたのだ相でありまして其の時に何ういふ事か船を出すと、引き潮で船が動かぬやうになつて仕舞うた。すると甲板の上で、村田新八と艦長とが喧嘩を初めて、村田が頻りに艦長を詰責する。艦長も命令だから出したのだと言つて中々引かぬ。「其の時老西郷は、其の喧嘩を見ながら、西瓜を二つ喰ひよつた」と、仰せられて、此の時は大層興に入らせられ、外の者は濟んで仕舞つても、まだ　陛下の御食事は半分であつたと、承つたのであります。夫れから又其の御歸りに、船が品川に着く事になつて居つたのに、海上の都合で俄に横濱に着かなくてはならぬやうになつた。其の時河瀨氏が乘つて居られて、其の頃は機關長が西洋人であつたもの故、其の通辯の爲めに河瀨氏が居られた。處が此の時初めは横濱に着けとの意味を手眞似でやつて居つたが、「遂に仕舞ひに河瀨が、「やれ〳〵〳〵」と言ひよつた」と、御物語りがあつて、大層興に入らせられとた、承はつたのであり

ます。夫れから又此の時横濱では、急な事とて何の設備も出來て居らず、何處か長い家に連れて行き居つた、するとすぐ向うにも妙な家が見える、之は何かと聞いたら、囚人を入れる裁判所であるとの事であつたとの御話もあつたさうであります。之は丁度此の時が、裁判官に　御陪食を仰せつけられた席であつた故、裁判所の事を仰せられたのである、と承はるのであります。之れは此の話を私にせられた方が、西郷や村田など賊名を負ふた者を、斯くの如く思ひ出し下されてある事が伺はれるとて、話されたのであります。

此等の話は新聞紙上にもよく現はれるのでありまして、之等の事柄は、大にしては國家、小にしては臣下を、常に忘れず思召し下されある事が分るのであります。之れ實に、日本歴史上、　神武天皇以來の英君でましますのみならず、世界歴史上の上に於ても、二人と無き皇帝にまし〳〵て、我々兎に角此の　陛下の大御代に遇うたといふ事は、此の歴史を見る上にも、私は感ずるのであります。人は今の世は澆季である人情が薄いと歎くのでありますも、私は此の明治の大御代程の聖代は無いと感ずるのであります。上に此の英明の　陛下ましまし、我々此の無比の　御治世に遇はせて貰つたといふ事は、是れ一に　大行天皇の御聖德の致す所と感ずるのであります。で一度び　御不例の事が聞えると、各地到る所に祈りの聲が聞こえ、殊に二重橋前の有樣などは、世界何れの國にも無い事でありまして、支那の如き、いつの間にか帝王が亡くなつて居らるゝ、といふ有樣でありますのに、隣りの日本に於ては天下殘らずの臣民の赤誠が自然に表はれ、　陛下の

上を思ひ奉りて、其御平癒を祈つたのでありますけれども、先き程の御話の如く、凡て凡夫の計ひであつたと見え、遂に力に及ばず、此の　御大喪に遇ひ奉つた事であります。此の上は此の　御一代の御高恩を思ひ　今上陛下に一層の忠勤を爲し奉るのが、　大行天皇に御報恩の萬一と思ふ事であります。外に高崎氏などより承け玉はり居る話もありますけれと、大抵は新聞にもあります事故ごく最近に　御陪食の人より承つた事を一つ申上げ　皆樣の御話の端緒と致した事であります。之はごく近頃の事で、「西郷の奴が、西瓜二つ喰ひよつた」と興に入りて仰せられた、其御話の有樣が、如何にも　陛下が臣下を思召し下さるお心が伺はれ、老西郷の偉大なる處をお認め下されてあるとが分ると、其方が話して居られたのであります。

此の時二三の談話あり、やがて

（一老人曰く）――先生私は家の者に能く申して居ります。今度　お崩れになり、　陛下はあなたと私の外に居て下さらぬ御方と言うて居ります。私と、あなたの外に居て下さらぬと子供にも能く申して居ります。天子樣と、阿彌陀樣と、私を別にして下されぬお方は　このお二方と思ひます。……

（近角曰く）、如何にも、お慈悲頂くと同時に、　天皇陛下の御恩は眞に分らせて貰へるのであります。私の友人に此の春信仰に入られたお方があります。其の方は常に國家といふ事と、信仰と兩立し難いやうに考へて居られたのでありますが、信仰に入りて初めて　大君の御恩が分り、今迄口に忠孝と言つて居つても、本當の忠孝で無かつたが、今度は彌々御恩の程が知らせて貰へたと申して居られます。で今度も　御病

中に夜寢られぬまゝに『現世利益和讃』を拜讀して、「山家の傳敎大師は、國土人民をあはれみて、七難消滅の願文には、南無阿彌陀佛をとなふべし」と頂き來ると、如何にも心底より此の廣大のお慈悲一つなる事が思はれ、今迄之程深き　御皇恩なる事が知れなんだ、と其の方が話して居られます。之は信仰上の事である、之は世間の事である、之は佛の事である、之は國家の方であると、二つに頭が分れて居る間は、信仰が未だ對絶の信心では無いので、信仰の事と世間の事と二つになつて居る間は、眞の他力信心の味ひでは無いのであります。先き程申す如く「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、頂け來る時、初めて、　陛下四十七年の御高恩は、一に私一人の爲めであつた、長々御苦勞をかけ奉り、實に申譯が無かつたと知らせて貰へるのである。此の信心の事が凡この事柄の上に現はれ來る處が信心の有難き肝腎の處なのであります。何うも茲で、お慈悲が頂けぬと、本當に思へぬのでありますが、口で申しますも實際に頂ける迄は、中々分り難いのであります。

此の間又御病中の事につき、二三の談話あり

荻野氏曰く、十八日迄は、御裁可が來て居ります相でありますも、十九日には是非御裁可を仰がぬならぬものがあつたさうでありますも、もう夫を御覽になる事が出來なかつたと見え、十九日からは下らなかつたと承はる事であります。又此間十一日大學へ行幸の時も、大學の二階の階段をお上りになるのが、今から思へば、おそらさうであつたと言ひます。又其折色々御說明を申上げるのに「ハアー〳〵」と仰せられる御聲が、今年は大層小さく入らせられ、黑板君なども今度は御聲を賜はらぬのかと思うて居つたら、御聲が小さいのであつたと申して居られました。今から思ふと、もう其頃餘程お苦しくあらせられたものかと、想像し奉るのであります

此の時席中より一青年進み出でゝ、告白して曰く

先生私は今日の、此の尊き御席に於て、以前　陛下に對し奉り、申譯無き考へ違ひを致して居りました事を、懺悔させて頂かうと思ひます。私は小學校に居りました頃は、學校の先生より忠孝の事を敎へられ、　陛下の御恩が非常に有り難く、生命を捨てゝお盡し致し度いと思ひ、其の爲め軍人になり度いと思うて居りましたのでありますが、大きくなりて、日露戰役の爲め俄に軍隊に入らなければならぬ事となり、爲めに自分の希望を曲げなければならぬ事となりました時、恐多い事でありますが、軍隊を恨むやうな心も起り、自分は國家の爲めに犧牲となりて仕舞うた、自分の前途も爲めに、滅茶々々となつて仕舞うたと、不平な考も起りて來まして、殊に信仰の事を聞くやうになりましてからは、眞宗の敎えは、一向專念無量壽佛である故、崇め奉るは阿彌陀佛ばかりである、と思ふやうになりまして、神樣にお參りしても、自分よりは少し偉い位の感じで居りました時があるのであります。處が東京に參り、先生の御話を聞くやうになりますと、先生がいつもの御話に、如何にも　陛下の御恩が有難さうに仕て居られる、私は不審でたまらぬ、先生の眞に有り難かるべきは、唯

阿彌陀佛御一佛なる可き筈なるに、と思ひまして、何うも此の點が分らぬでありました。殊に伊藤公薨去の時も、色々國恩に就きての御話も秀りませず、又江州の地震のあとに、　陛下が態々北條侍從を見舞の爲めに、お遣はし下されたといふ事を、先生が如何にも難有相に話されたのも、私には分らぬのでありました。或は先生は、國恩は斯く有難がらんならぬものであると、力みて居らるゝのであるかと、思ふ程でありました。處が此の度び入信してお慈悲に氣づかせて貰ひ初めて我が身の惡しさが分り、强情我慢の項が折れ、茲に初めて天恩國恩の廣大無邊なる事が感佩する事が出來るやうになりました。夫れ故今度御崩御になりましてからは、其の事を思ひ出し、實に濟まぬ〳〵〳〵と思ひまして、先達ても二重橋に參り、本當に申譯が無いと、御詫び致して來た事であります。何かの御言葉に「生々世々の國恩よりも、此の度びの皇恩殊に深い」とある御言葉を思ひ出し、實に有難く感じまして、此間淺草での先生のお話なども、此度びは眞に有難く頂かせ貰うた事であります。

近角曰く

夫れはまことに難有い告白であります。實は今日の御席で夫れ程に申すもいかゞと思ひ、控えて居たのでありますも、私が平素氣をつけなくてはならぬ〳〵と、言ふのが其處であります。今日本人は、一方には「之れが時代の思潮である」「人間の思想は時代と共に代つて行くのも已を得ぬ」と、自然主義を振り廻はして、人間の思想の薄らぎ行くを思はて、之れが人間の心の成り行きであると、思うて居る側と、又一方には感心は感心なるも、あなたが小學校で受けられたといふ律法主義の敎育である。惡くは無けれども、形式ばかりで、信念の伴はざる道德である故に、現にあなたが學校で夫れを聞きながら、軍隊に入ると變化を生じて來るやうな事になる。此の二つて、今國民の思想は、行き違ひ〳〵になつて居るのであります。遠慮無く申すと、今日の敎育も矢張り此の何れかになつて居ると、私は思ふのである。して眞に心より、　陛下が夫れ程に御心配下されてある事が頂けぬのは、此の信仰が無いからなのであります。　陛下が斯くの如く御親切に、國民を撫育し下さる大御心は何うかと申しますに、斯く長々の御恩により、結局我々をして此の眞實の自覺に到らしめ下さるのである。之は日本には昔からある　御思召なのでありまして。……故に私は二重橋に參つて　御平癒をお祈りするも結構ではあるが、外界の事を彼是れ思ふよりも、先づ自分自身の心を考へて見よ、と言ふのであります。皆んなが、人の事だと彼れ是れ言ふのでありますも、其の言うて居る者の心が、必ず此の中の何れかに轉んで居る。先き程言ふ私の友人の場合でありますが、其友人はやゝもすれば國家は罪惡の塊りであるといふ風の考へにおちて困つて居る人であつた。其人が此の度び信仰に入ると共に、「あゝ自分が惡るかつた、此度こそ眞に　國の御恩といふ事が分つた」と言うて呉れられた。之は其の方がごく眞地目に私に話された事であります。斯く我々眞にお慈悲の分らぬ間は、天恩國恩といふ事も、眞の意味に於ては分らぬのであります。今あなたが思ひ切りて言

はれた處は必ず、皆なの人の心に在る問題に違ひ無いのであります。故に必しも經を讀むが　御奉悼に非ず、御平癒を祈るが御報恩に非ず、此の　陛下の眞の思召を頂き奉る處が無くては仕樣が無いと申すのであります。屹度多くの人の中にはあなたの言はれたと、同じやうの考に陷入つて居る人があるに違ひ無いのであります。今我が國には一方に忠孝の律法主義がある一方には、自由なる思想が行はれて居るのである。之では、いつ迄經つても眞實の處は頂けぬ。人間は一度信仰の上より、眞に我が身の淺間しく、申譯無き事が頂け來らねば、眞に天恩の有り難き事も頂け來らぬのであります。今申す　陛下の御慈育は、結局信仰に到らしめ給ふ道行きであると申したのは、之はお慈悲の下に私が然う頂くのでありまして、日清日露の二戰役も其の廣大なる事柄が、無意識に現はれたものと、私は信ずるのであります。現はれ居て、まだ皆んなが自覺して居無いのであります。去りながら自分の力で之を頂くに非ず、佛のお慈悲の下に茲を頂かせ貰ふのであります。之れが親鸞聖人が、「朝家の御爲め國民の御爲め、念佛まふしあはせたまひ候はゞ、めでたくさふらふべし」と仰せられた處なのであります。こは私も今日は、よう申さずに居たのでありますが、只今の適切なる懺悔を承るにつけて、申したのであります。之れ恐らくは西洋人が、言を極めて吾が　陛下を讃歎し奉る點であらうと思ふのであります。西洋人が一方には日本人を戰爭好きの國民であるかと思ふと、又一方

陛下の　御製には

四方の海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらん。

此の御製に感激して、ルーズベルトが、日露戰役の仲裁を思ひ立つたと、此間の新聞で承る事でありますが、斯く一方には日本人は、戰爭的の國民である、武士道である、などと言ひながら、一方に斯く一視同仁の　陛下のうづ高き御心がましますのである。西洋人には分らぬ筈なのである。日本人ですら茲は餘程氣をつけぬと分ら無いのであります。去りながら之は決して、人を咎む可き事に非ず、問題は人にあるのでは無い。今の告白にしても、其の間違が甞つて自分の心に在つたと申されたの故、實に何より尊きお話と思ふのであります。故に之れは人々責める事では無い、自分にしてもお慈悲頂かぬ前を思ふと、人の間違ひをするのも無理の無い事故、之を思へば一人々々に、此のお慈悲を傳へなければならぬ事なのであります。すると私如きも、何かはさて措いて傳道に行かなければならぬ筈なのでありますも、どうも此の　御崩御に遇ひ奉りてからは、氣が進みませぬ故此の一月ばかりは我が儘をさせて頂き、東京に留まりて謹慎させて頂かうと思ふ事であります。先き程の講話の上で申した　今上陛下に仕へ奉る心が、　先帝陛下に仕へ奉る心であるといふ事も之は今日初めて申したのでありますが、之なども信仰から出るので無いと、人間は必ず事により物に從ひ、區別する心が出て來るのである。國家は永久にして百世代はる事が無い、といふ眞の味ひは、此のお慈悲の上からで無いと、本當に了解する事出來ぬのであります。

猶ほ只今の御話しにありました私が侍從の御見舞ひに最も

深く感じたのは、一昨年私が琉球に參つた時なのでありまして、私が琉球に參ると丁度　陛下からの御使ひで北條侍從が琉球にお出でになつてる處であつた。殊に私の感じたのは、既に其時で四度お出になつてある事で、殊に那覇に有名なる眞敎寺と申す寺があります。折から其寺で釋尊降誕會が開かれて、其處へ御出席を御願ひしたら、「そんなら個人として行きませう」とて、無雜作にそんな會に迄お出でになつて居るのである。私は斯る事例は內地でも見られぬ處であると、不思議に感じてふと氣がつくと、內地は餅に普ねく皇化が行き屆いて、下さるのである、之は偏に邊鄙の者に大御心を屆けて下さる思召である、と氣がついて見ると全く『歎異鈔』の「善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや」の思召しである。私は此の時深く感じたのであります。夫れから又朝鮮併合の時私が聖德太子のお伴して朝鮮に參りし時も、矢張り　陛下の御勅使で同地に御出でになると、丁度同じ船に乘つたのである。私は此の時も、一面併合が何うの斯うのと政治上の意味よりは何とでも言へよう、が　陛下に於かせられては眞に朝鮮を善く仕てやらうとの御精神が現はれてあると深く感激して、即ち私は京城の眞中で、此の事を話して來たのであります。又伊藤公の死なれた時、侍從の事に就き申したのは、矢張り此の時も御勅使として遣はされたのは北條侍從であるが、此の時は政治向きの勳功によりて遣はされたのである、民百姓を哀れんでお遣ばし下さる場合ひとは違つてあるとの事を申したのである。今度なども、今迄のきまりから言ふと二重橋にあういふ具合に、多くの國民が集まつて親しく　御平癒をお祈りするといふ事は、今迄のきまりより言ふとよく無きも、特別の　皇太后陛下の思召でお許しがあつたと承はる事であります。實に一視同仁の、殊に難有な位の低き者に向ひて、其の者が特に哀はれとの御心の現はれと頂く事であります。夫れを私は特に強いて然う思へと言ふのでは無い。然う思へぬのは、思へぬ自分の心に曰くのある事を氣を附けよと申すのであります。此の間まだ他にも、之れを言はれた方があつた。「お慈悲頂いて、初めて國家の眞の有難さが分つた」と話された方がありました。

殊に今度の祈りといふ事につきても、眞宗では祈りをせぬ。眞宗では祈らぬも、今度は國民を擧げて皆な祈つた。之に對して、「他宗では祈るも我々眞宗では祈らぬのである」と、力みて祈らずに居るのでは、實は祈り度いのであるけれども、無理に我慢を仕て居るのである。故に此の際世間の手前もあるから、祈らぬと言ふ事は、少し心得た方がよいといふやうな事になる。何も眞宗だからとて祈らぬのでは無い。我々出來得るものなら祈りも仕度く、生命も差し出し度いのである、が如何せん、人間の力では夫れが出來ぬ事なのである。夫れを何んと思うて見ても、私の力に及ばぬ。『歎異鈔』には

わがちからにて、はげむ善にてもさふらはじこそ、念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば。云々。

如何せん、自分の力では自分の事さへ出來ぬ者なのである。其の者が何と天に祈りて見ても、夫れで何とか出來る力があるか、祈るといふは、之れ却て自分の力を知らざりし處より出

て來るので、我々自分の力を知らざる間は祈り甲斐があると思ふのであるも、彌々自分の力が間に合はぬとなると、祈れぬやうになつて仕舞ふのである。祈りを仕てならぬから爲ぬのでは無くて、仕てならぬからせぬのでは、然う言ふ言葉の下に、其の人の心既に祈つて居る。然う言つてる言の裏に、既に祈り度き心が現はれて居るのである。我々にしても若し自分の力が間に合ふものなら祈りたい、が如何せん、如何なる事仕て見たつて此方の力では及ばぬの故、祈る力も無くなり、自分の事すら何事も出來ぬ人間が、私の力で何んと仕て見たつて何うなるか。實に斯く時至れば何事が現はれて來るか知れぬ無常の人生に、實に其の如き人間は何とも仕て見ようが無い事となる。ぢやによりてこそ茲に廣大なる其の如き者を特に哀れみ下さるお慈悲より、斯く迄待ち兼ねて居て下さる遣る瀬無き佛がまします。之を頂き奉り、之を頂くと、親鸞聖人の

されば　とて念佛をとゞめられさふらひしが、世にくせごとのをこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかくたのみて、世のいのりにこゝろにいれてまふしあはせたまふべしとぞおぼえさふらふ。(中略)詮じさふらふところは、御身にかきらず念佛まふさん人々は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞめでたくさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし、己が御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれがしとおぼしめすべしとおぼえさふらふ。よく〳〵御案さふらふべし。

の御教化は、此の信仰の上より出て來るのであります。此の信仰の上より申せば、人から祈りせぬからいかぬと言はれやうが何う言はれようが、我が力では何とも及ばぬ。が此の廣大なるお慈悲の下に、何うか御恙のましまさぬやう、又　大御心の普ねきよう、御念佛が出來るのであります。此のお慈悲の上からは、此方が祈らぬから、よくして下らぬといふ事は無い。皆んなが祈りを、此方から祈るから、向ふからよくして下さるとするから、いかぬのである。お慈悲の方からは、いつ如何なる時と雖も、思召し下されて居ぬ時とては無いのであります。併しこはお慈悲の上より頂くので、此方の計らひでは無いのであります。夫れ故聖德太子の御病氣の時、法隆寺の金堂の御像の裏の銘の御文に

此の願力を蒙り、病を轉じ壽を延ばし、世間を安住せん。若し是れ定業にして、以て世に背く者ならば、往きて淨土に登り、早く妙果に昇らん。

とある之れになるのであります。若し天壽を全うし、明治の大御代を全うして下さるものなら、長く此の世に御留まり下るやう、若し又御崩れになるものなら、之れ實に已むを得ぬ、彌々其の時は、一如法界の都に歸り給ふのである。して見れば之れ實に我々に此のお慈悲をお知らせ下さる大權の御方たる事を、知らせて頂く外なき事となるのであります。之れが說明では容易に分からぬ。今程お慈悲に氣がついて、初

めて分かつたと言はれたのは茲なのであります。之れさへ申せば、此の以上に言ふ事は無いのであります。で宗敎と國家といふ事が相對的に兩立矛盾して居る間は、國家の眞に有難き味ひも眞宗の眞にうづ高き味ひも分らぬ、絕對の一つの廣大なるお惠みなる事が頂けた處で、初めて本當に天恩の忝なき事が分らせて貰へるのであります。最后にもう一度繰反して皆さまの注意を促がします。眞實の信仰なるものは國家世間と矛盾するものにあらずして、却て國家の眞意義を自覺せしむるものであります。即ち信仰ありてこそ、天恩國恩を感ずる事が出來るやうになるのであります。

猶ほ此の點より言ふ時は、私は何事が起つたつて悲觀を仕無い。此の頃も或人が、此のやうに國民が不信仰の狀態に在つては、我が國の將來も如何ならんと、非常に慨歎して私に話された。私はこれに對し何とも返事の仕て見ようが無く、唯「へー」と申したなりに仕て置いた。すると其の方翌日になりて、昨日あなたは私があれ程赤心で慨歎して話すのに、あなたはなま返事をして、自分は心中傾る不滿であつた、あれは何ういふ譯だと語られた。私は申したに、「私は現に此のお慈悲がまします上は、必ず我が國は此のお慈悲が現はれて下さると信ずる故、少しも不安には思は無い。我々惡しき者を彌々お見捨て無きお慈悲故、現に私が此の事を實驗して居るから、如何に時代思想が險惡でも、必ず一人々々に御信心が起る事と信ずるから、返事の仕て見よう無く、なま返事を仕て置いた事である」と話した事であります。すれば其の根源のお慈悲を聞かせて貰ふた事は、何より我々の仕合はせと思ふ事であります。すれば我々は此の世の御高恩を蒙る上に、殊に今生此の優渥なる　大御心の下に此の法をきく御大恩を荷ふ事なれば、今生の御恩一入重い事と頂く次第であります。

他力の信をえんひとは、　佛恩報ぜんためにとて、

如來二種の廻向を、　十方にひとしくひろむべし。

我々に於ては、他の事が御報謝の道では無い。何うぞ皆樣と共に、此の喜びの上より、一人にても此の思召の屆くやう、

今帝陛下にお事へ仕度いと思ふ事であります。ちと今日は言ひ過ぎ、恐懼に堪えぬ次第であります。(己上)

本誌前月號又々休刊と
相成り、申譯御座無く謹
みて御詫び申上候

求道發行所

講話

『教行信證』信卷三心釋

《第二回夏季求道會講話》

近角常觀

第一席

一

昨年、親鸞聖人の御遠忌年を紀念として、第一回夏季求道會を開かせて貰ひ、本年は其の續きとして第二回を開く事になりました。殊に本年は雜誌の發行遲れ此事を前以て廣く一般に御通知する事も叶はず、何の準備も整つて居ぬのであります。が何うか此八日間を御緣として、第一私自身が平素怠り勝ちになつて居るのでありますから、先づ私自身より、親鸞聖人の御勸化の趣きを、直さま〳〵仰がせて頂き度いと思ふことであります。それで講本も昨年に引き續き、『教行信證』信卷を拜讀する事に仕たのであります。既に昨年も此の信卷を充分味はせて頂き、皆樣も非常に如來のお慈悲をお喜び下されたのでありますが、本年は彌々肝腎の聖人御自釋の三信釋の御文を拜讀する事となり、一入難有く感ずる次第であります。何うか皆樣も此の機を利用して、各自に佛の大慈悲をお喜び下さるやうに、切望に堪えぬのであります。先づ初めに御文より拜讀させて頂きます。

二

貞元ノ新定釋敎ノ目錄卷十一ニ云。集諸經禮懺儀上。下。大唐西崇福寺ノ沙門智昇ノ撰也。准ニ貞元十五年十一月廿三日ニ勘編入ル云云。懺儀ノ上卷ハ、智昇依テ諸經ニ造ル懺儀ヲ、中ニ依テハ觀經ニ引ケリ善導ノ禮懺ノ日中ノ時禮ヲ。下卷者比丘善導ノ集記ト云云。依テ彼懺儀ニ鈔シテ要文ヲ云。二者深心即是眞實ノ信心。信ハ知スベシ自身ハ是具ニ足セル煩惱ヲ凡夫、善根薄少ニシテ流轉シテ三界ニ不レ出ズ火宅ヲ。今信ハ知シテ彌陀本ノ弘誓願ハ及マデ稱スルコトニ名號ヲ下至十聲一聲等ニ定テ得ム往生ヲ上、及マデ至ニ一念ニ無レ有ル疑心ノコト、故ニ名ケテ深心ト乃至其レ有レ得ルコトヲ聞ニ彼ノ彌陀佛名號ヲ歡喜シテ至セバ一心ニ、皆當ニ得ベシ生ルコトヲ彼ニ。抄出

之は昨年の講本の直ぐ續きなる善導大師の禮讃の御文であります。即ち今日初日に當り、此の御文によりて、善導大師が我々信心の有樣をば示されたる、機法二種深信のお示しをば、拜讀させて頂く事が出來るのであります。さて茲には叮嚀なる書き方がせられてあり、調べれば夫れ〳〵譯有る事とは思ひますけれども、今御文通りに申しまするに、之れは支那の貞元中に撰せられた『新定釋敎目錄』なる本がある。其中

に『集諸經禮懺儀』上下二卷ありて、之は親鸞聖人が常に引用なされる御本であります。即ち諸經中より、禮讃懺悔の文を集めたるものにて、即ち今日で言へば、我々が佛前に於て信仰上より、種々讃歎の文や、自己の告白懺悔を申述べる、其の如き懺悔禮讃の言葉を諸經中より集めたるもので、夫れが大唐西崇福寺の沙門智昇の選であると、申すのであります。「貞元十五年十月二十三日に准へて勘編して入ると云云」とは、此『懺儀』を十月二十三日に、准へて勅選中に入れたとの意味で、時の天子は玄宗皇帝とあります。而して其の上卷の方は、智昇大師が諸經に依つて造られたもので、其の中に『觀經』に依つて、善導大師の禮懺の日中の時の禮文が引かれてある。又下卷は全く比丘善導の集記であるといふのであります。次に「彼の懺儀に依て要文を鈔して云く」とは、今其の『懺儀』の中に智昇大師が善導大師の御文を引かれてある、其の中に此の肝腎の要文が引かれてある故、夫をば茲に拔き出す、と言はれたのである。之は嘗て私が親鸞聖人の御直筆を拜見した時に、矢張り善導大師の禮讃の勢至菩薩の文を引かれてある處に、『集諸經禮懺儀』の文なり、とあるを拜見した事があります。

三

處で斯く何故か、親鸞聖人は此の文を善導大師ぢかづけに引かずに、横の方よりお引きなされてある。こは如何なる思召しか、私も深くは言へぬのでありますけれども、恐らくは此の機法二種深信の御文が、信仰上懺悔告白の表はれとして其の當時にありても著しきのもて、既に智昇大師の『懺儀』の中にも、斯く引かれてある程である、故に此の意味よりして聖人も之を善導大師直接に引くよりも、之を尊みて智昇大師が引かれたる其の御文の方よりお示し下されたのでは無いかと思ふのであります。一說には又親鸞聖人が、斯く善導大師直接にお引きなさら無つたは、聖人が其の本を持たれ無かつた爲めであるとの說もありますも、こは勿論私には確かと分らぬのでありますも、全體宗敎上にありては、我々信心の有樣を懺悔告白するといふ事は非常に大切て、隨分西洋などには「コンフェッション」と言ひて、此の意味の事が澤山書かれてある。其の意味より言うと、東洋卽ち佛敎では夫れが少いと、私初め嘗つては思うたのでありますも、こは實に誤りで、斯く善導大師に至りては『禮讃』の如き、實に御自身の懺悔告白の有の儘を披瀝せられたる立派なるものがあるのである。されればこそ智昇大師も之を尊みて、既に其の當時に於て『懺儀』の中に加へられたので、此の意味合ひより聖人特に、智昇大師が尊崇して引かれたる、其の御文の方よりお示し下されたのであらうと、思ふのであります。

全體善導大師は信仰上より言ふ時は、支那佛敎高僧中最も敬虔なる信念を以て、佛に歸依懺悔なされた方で、此の點に於きては殆んど古今に頻無しと申して可い位、他力信仰上眞の懺悔告白といふ事も、善導大師に至りて始りたと言うても敢て不可は無いのであります。若し今日の新しい言葉で言ふならば、此の他力の眞の敬虔なる信心の味ひに於ては、善導大師が、斯く支那に於て示されたればこそ、日本に於ても斯く

敬虔なる他力念佛門の信仰が起つたので、さればこそ親鸞聖人も成程自ら親鸞と名のり、私淑なさるゝ處は天親、曇鸞の兩師にして、『敎行信證』の根本に於ては曇鸞大師に據られたのであるも、其の曇鸞大師に據らるゝ所は佛の本願力回向といふ所をお示し下さる處にして、彌々其の本願力回向の大なるお力を聖人が有難く頂かれた信心、其の信をお示し下さる所になると、いつも善導大師によりてお示し下されてあるのである。こは大に氣をつくべき所なのであります。

四

漸次話が大きくなりますも、親鸞聖人の『敎行信證』中で、一番大切なるは、『行卷』『信卷』の二卷であります。而して前の『行卷』は、天親、曇鸞二師により、如來の本願をお示し下されたものである。專門に見る方は誰方も知つて居らるゝ通り、『行卷』は悉く、阿彌陀佛の本願力より、我々を遣る瀨無くお救ひ下さる力をお示し下されたのである。而して其の『行卷』にある本願のお示しは、卽ち法然聖人の「撰擇本願南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」の御敎化より出て來たので、卽ち言ひ換ふれば、『行卷』に示されたる如來廣大本願の敎えを『歎異鈔』にある如く

たゞ親鸞におきては、念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。

と信ずる、其の信じた處が『信卷』である。其の『信卷』が皆な善導大師でお示し下されてあるのであります。て親鸞聖人が『行卷』で本願力をお示し下さる處は何うかといふに、『行卷』のお示しは皆南無阿彌陀佛の六字に籠るのである。往還二種回向皆な此の本願南無阿彌陀佛のお力であるは言ふ迄も無く、三世十方の諸如來、各法をお說き下されたも、皆な此の廣大なる本願南無阿彌陀佛をお說き下されたものである、とのお示しが『行卷』である。而して此の廣大なる本願念佛の敎えは卽ち法然聖人の御敎化で、卽ち之が行、夫を承はりて「信ずる外に別の仔細なきなり」之が『信卷』となるのである。て親鸞聖人晩年の御作『愚禿鈔』が矢張り之て、『愚禿鈔』の上卷は、凡て皆な遣る瀨無き佛の本願力を書かれてあり、下卷になると全く善導大師の『散善義』によりて、其の遣る瀨無き願力を頂いて、之を信じた『信』の味ひが示されてあるのである。て一方には又聖人には、善信の名がある位で、聖人はいつも信心の一段になると、善導大師によりお示し下されてある、のである。之は何うかといふに、如來の大悲を信じたる信心の有樣となれば、卽ち懺悔告白で、其處になると善導大師の外無くなつて來るのである。故に皆樣のお喜び下さる『歎異鈔』の二章でも矢張り夫れで、『歎異鈔』の二章は、卽ち法然聖人の仰せを親鸞聖人の信ぜられたる告白で、夫れが皆な善導大師のお示し下さる信心の儘なのである。二章の「たゞ念佛して」は、卽ち南無阿彌陀佛ばかりといふ事、「よき人の仰せ」は、卽ち法然聖人の仰せ、此の仰せを頂いて、善きにつけ惡しきにつけ唯法然聖人の仰せのみと、信ぜられた信心の有樣は、卽ち善導大師の『散善義』の儘が、親鸞聖人の腹中に全く生きて書かれてあるのである。されば智昇大師も之れ程尊みて、勅選

中に加へられた事故、其の心持て斯くは叮嚀に書かれたものと思ふのであります。

五

さて本文に戻りて、要文を鈔して云く、「二には深心とは卽ち是れ眞實の信心なり」――實に有難きお言葉であります。深心とは、深き心といふ意である、『觀經』に至誠心、深心、廻向發願心とある、あの深心であります。深き心とは、深いとは何が深い心であるかといふに、卽ち是れ眞實の信心であるとのお示しである。何うも茲になると、言葉が充分廻らぬのでありますが、其の眞實の信心といふ眞實とは何か、眞のまことである。眞のまことは、大悲の眞に私を見捨て給はぬ佛の御まことが眞實である。で深き心とは我々が斯く思ふとか、斯く頂くのだとか、我々の方より考へ出したる心にあらず。明らかに眞の佛在しまして――我々が三界に流轉して居る其の者を哀れみ下さる眞の佛在しまして――之を親鸞聖人より言ふならば、『眞佛土卷』にお示し下さる眞實の佛が在し〳〵て。其の眞實の佛とは我々が生死海に沒溺して迚も普通の道では助らぬ者故、其の助らぬ者を助けんが爲めに、迷へる者を救はんが爲めに、何うかして〳〵の遣る瀨なき大悲の御心がもととなりて、五劫の思惟永劫の修行を經て、我々人間の測られざる佛智不思議の廣大の御まことの塊りとして、遂に正覺を成就し、阿彌陀佛と名乘りを揚げ、光明無量壽命無量の姿を現はして、其の遣る瀨無き大悲のお方が、我々十方衆生の上に待ち兼ねて居て下さる、といふ事之が眞宗の眞宗たる處である。親鸞聖人の眞宗は之をお知らせ下されたのである。「念佛成佛是れ眞宗」とは、之をお示し下されたのであります。而して斯く廣大の佛が、斯く大悲の心を以て我々を哀れみて、斯くの如き姿を現はし、南無阿彌陀佛と名のりを揚げ、我々を待ち兼ねて居て下さるといふ事を眞に敎へて下されたが、聖人の『敎行信證』となるのである。能く言ふ御文でありますが、『歎異鈔』に、

他方眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる

卽ち「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎」とは、『顯淨土眞實敎行信證文類』である。本願を信じ、念佛を申さば佛になる」は『敎行信證』である。之れが聖人一代の御敎化である。眞宗の敎義と謂ひ、聖人の化導と言ふも、此の以外に何も無いのであります。

六

其處で其の遣る瀨無き佛の思召敬、之れが眞實である。故に眞實は人間の此方よりこさへるに非ず、佛の方より眞に遣る瀨無く見そなはし下さる、佛よりの眞實である。而して此の眞實が、眞に我々の心に徹到して下された一念が、眞實の信心となるのである。此の遣る瀨無き佛のお心が、我々の心に屆き、今迄三界に寄る邊無かりし我々が、此の生死海に苦しめる我々の爲めに、斯くも待ち兼ねさせ給ふ親の遣る瀨無きみ心がまします、といふ事を聞かせて貰ふ一念に、此の如來の眞實が、我々の心に貰はせて頂かれるのである。之れが

眞實の信心であります。『和讃』に、

十方諸有の衆生は、　阿彌陀至德のみ名をきゝ、
眞實信心いたりなば、　おほきに所聞を慶喜せん。

即ち「眞實信心いたりなば」である。我々が信ずるとは、何うして信ずるのかなどの、自分で信ずる信心にあらず。十方諸有の衆生、三界流轉の我々は、斯くも廣大の慈悲で、遣る瀬無きみ心を差向け給はる南無阿彌陀佛の佛の御名を聞く一念に、聞其名號信心歡喜である、斯くも遣る瀬無く思召し下されてある親の御心が、其の一念に至り屆いて下さるのである。此方から作る信心なら、「眞實信心いたりなば」では無い。又の『和讃』には

若不生者のちかひゆへ、　信樂まことにときいたり、
一念慶喜するひとは、　往生かならずさだまりぬ。

佛の廣大の若不生者の誓ひあればこそ、此のしぶとき私に、其の廣大の思召が到り屆いて下さるのである。其の屆いて下された一念が即ち眞心徹到、之れが眞實の信心である。『和讃』には又

眞心徹到するひとは、　金剛心なりければ、
三品の懺悔するひとと、　ひとしと宗師はのべたまふ。

之が丁度、前年度講本が『和讃』で申せば、

釋迦彌陀は慈悲の父母、　種々に善巧方便し、
われらが無上の信心を、　發起せしめたまひけり。

『本文』で申せば、

敬て一切の往生の智識等に白さく、大に須く慚愧すべし、釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり。種々の方便をもて我等が無上の信心を發起せしめたまへり。

の御文で畢りてある。次ぎが丁度此の眞心徹到の和讃となるのであります。

七

で「深信とは眞實信心なり」――此の眞心徹到の有樣をお示し下されたのである。而して其の樣は何うかとなると、即ち次に「自身は是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して、火宅を出でずと信知す」――之れは『散善義』の機法二種深信の御文と全く同じて、唯少し夫れに言葉が加はつて居る丈けであります。『散善義』の御文は、

一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に沒し常に流轉して、出離の緣有ること無しと信ず。二には決定して深く、彼の阿彌陀佛の四十八願は衆生を攝受して、疑ひ無く慮り無く、彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ず。

殆んど同じである。もう茲に至ると、之に入らざる言葉を加へると、却つて折角の御文を傷つける恐れがある。實に我々の淺間しき事、力なき事を、お慈悲を仰ぎて、思ひ切り仰せ下されたお言葉で、懺悔として之れ程深刻なるは無いのであります。「自身は是れ煩惱を具足せる凡夫」――御同樣に日夜に我々は煩惱を作らぬ暇とては無く、實に我等は一つとして缺け目なき煩惱具足の身である。親鸞聖人は頻りに煩惱具足といふことをお示し下されてある。『和讃』には、

煩惱具足と信知して、　本願力に乘ずれば、

すなはち穢身すてはてゝ、　法性常樂證せしむ。

『歎異鈔』には、

佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることとなれば、云云。

又『信卷』の中には、

阿闍世とは、即ち是れ煩惱等を具足せる者なり。

との御文もあります。斯く我々は、有りと有る煩惱を遣らず具足して、一つとして善くすること出來ぬ身てある。「善根薄少にして三界に流轉して、火宅を出ずと信知す」――善と名く可きものは一つも無く、永久に三界をさ迷ふて飽く迄此の火宅の苦界を、出られぬ身てあることを信じ知るとお示し下されたのてある。猶ほ次ぎのも一緒に頂くと「彌陀の本弘誓願は名號を稱すること、下至十聲一聲等に及ぶまで、定て往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで、疑心有ること無し。故に深信と名く」と。――彌陀の本願は、十聲一聲等に及ぶまでてある。一代稱へる者でも、たつた一聲稱へる者でも、其の初めて稱へた一念に、往生は決定と信知させて貰うとお示し下されたのてある。「一念に至るに及ぶまて疑心有ること無し」――之は『散善義』には無いお言葉てある。此の彌陀佛の本願は手間暇が入るのでは無い、此の仕樣の無き者をお見捨て無きお慈悲である事を、たつた一念頂く時である。其の「一念に至るに及ぶまて疑心有ること無し」、其の一念なりとも、其の一念にすつきり疑ひの無くなつて仕舞うたのが、大信心を得たのてある。之れが深信であるとのお示してあります。

さて之は何と申さんか、此の機法二種深信のお示しは、實に尊きことにて、同じ事なれども繰反し〳〵能く頂かなくてはならぬのてある。第一機法二種と、二つ別々にあるけれども、之れが二つあるのでは無い。此の事を先づ事を分けて申さなくてはならぬのてある。

八

先づ私の氣のついた一念は何うかと言うに「あゝ自分は惡い者てある、一つも善き所とては無い、實に自分は惡しき者てある」と知らせて貰ふた、其の自分は惡しき者てあるといふのが、自分は惡しくて困るといふ事ては無いのてある。茲を能く聽き分けて頂かねばならぬのてある。私など色々自分の告白を書く時に、入信前に自分が種々苦悶した事が書いてある。茲にお集り下されてある方々は、何れも私の經驗は充分お聞き下されてある方が多いのてありますが、中にはまだお聞き下されぬ方もあらうと思ふ、其の中段々に話す積りてはありますが、私の『懺悔錄』てあります。『懺悔錄』の中に、私が信仰に入る時に苦しんで、自分が惡しくて仕樣が無い〳〵と歎き悶えたといふ事が書いてある。すると動もすると其の私の、自分は惡い自分は惡いと、泣き悲しんで居る夫れが機の深信だと思はれる人があるのてある。若し斯く思ふて居らるゝ方があると、之は餘程氣をつけて頂かなくてはならぬのてある。私が自分が惡いと苦しんで居る處が、機の深信では無い。若し之を機の深信だと言ふ時は、昔から最も間違ひ易き、機の深信は自力であるとの誤りが之から出て來るのてある。處が昔から茲がよく間違つたばかりて無く、今日青

年の人が皆な之れになつて居るのである。今日の人の罪惡觀と言ふて居るのは、皆な是れになつてあるのである。自分の惡い事を苦しむのが罪惡觀であると、今日の人は思ふて居らるゝのである。或は之を罪惡觀と言つてもよいかも知れぬが、決して機の深信では無いのである。若し之を機の深信と言ふならば、基督敎の罪惡觀などは、皆な之になる。今私として申すならば、罪惡觀無常觀といふのは、決して自己の罪惡無常を氣にする事に非ず、寧ろ眞に其の罪惡無常に覺悟が出來、衷心より謝り果てゝ夫れが氣にならぬやうになつたのが罪惡觀無常觀である。自分の身を責めるのが罪惡觀である、と思ふて居るなら大間違ひである。大分話が側面的になり、眞の信心の味ひをお話するのが遲れるやうでありますも、茲は初めによく御注意申して措かねばならぬのである。反す〳〵も我が身の淺間しき事を、氣にするのが罪惡觀では無いのであります。

九

處で多くの人が信仰を求めらるゝに、何うも其人々々の風習に從つて、二つの道があるやうである。何うかと申しますに、吾が身は惡い〳〵と口には言つて居つても、其の實心では一向然う思ふて居ぬ人があるやうである。之れは從來聽聞を仕つけて、吾が身は惡い〳〵と口癖になつて居る風の人に、之れがある。何うかと言ふに動もすると、佛は自分が惡しくても助けて下さるんだから、惡しくても構はぬ、といふやうの横着根性に流れて居る人が多いのである。又一方人生上の問題より信仰に進まれる人達は、我が身の惡い事がいつ迄も苦になり易くて仕樣が無いのである。即ち信心を聞きつけた人は、お慈悲に慣れて吾が身の惡しさを知らず、又今日の人生問題より信仰に向ふ人は、いつ迄も人生が思ひきれず自分が惡い〳〵と苦む傾向になり易いのである。よく世間で今迄少しもお慈悲を聞いたことの無い方に、此のお慈悲の事を申上げ、我が身の淺間しき事をお話すると、成る程自分は今迄惡るかつたなと氣づかるゝ爲め、却つて夫より自分は惡い〳〵と苦に仕出し、苦しまるゝ人が多いのである。苦しむ事が決して御信心では無けれども、斯ういふ風の人達は、初めより佛は助けて下さるのぢや〳〵と、我が身の罪惡を更に苦しまずに居る人達よりも、餘程眞のお慈悲に行き易いのである。勿論廣大のお慈悲の上に、どの道といふ事の有る可き筈は無く、又我が身の惡しさを氣にする事が決して機の深信では無けれども、此のお慈悲に氣づかせて貰ふ道ゆきとしては、多くは一度は我が身の惡しき事が氣になりて、仕樣がなくなつて來るのである。

十

處で其の苦しんで居る胸中へ、其の胸中をすつかり知り拔かせられ、——我々の罪の深いことは、如何に深いかと言ふに、實に我ながら呆れ果てる程の胸の中である。人に慰めを求めて得られず、世の中に求めて、一つも安んずる所が見出せぬ。人も我も皆な闇み、罪み、世の中は凡て虛假不實、無常、我が身は實に是れ罪惡の塊、兼ねて賴みおきつる妻子も財産

も、彌々となれば一つも賴みにならぬ、實に右にも左にも、出るに出られぬ我々の有樣である。其の出るに出られぬ、善くなれぬ我々なる事を知召し、夫れを御承知下された上からの廣大の大悲である。「佛かねて知しめし、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」——佛は其の煩惱具足の我々の淺間しき心を、皆な知り拔き、其の淺間しき者なるによりて、彌々此の者をお見捨て無く廣大の大悲を賜はるのであると、此の遣る瀨無きお心を聞く一念に、今日迄の、「困る」「善く仕なければならぬ」の思ひが、ふつりと底から根切れが仕て仕舞ひ、此の淺間しき、寄る邊無き三界流轉の私の爲めに、態々一如法界の都より姿を現はし、待ち兼ね給ふ、この親のお心を頂く一念に、此の身は何うならうと、斯うならうと「地獄は一定すみか」の身の上である。其の身の上へ「たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべし」との廣大の仰せを頂くなれば、此の仰せ一つに腹一杯安心して、今日迄「善く仕度い〳〵」の根性で一杯でありし者が、ふつりと其の根性の根が絶えて仕舞ひ、惡人が惡しき心の其の儘で、お慈悲の前に我が身を投げ出し、廣大の仰せを喜ばせて貰ふ處が機の深信の有樣である。茲は何うも言葉には充分表はせぬのであります。

十一

殊に此頃私のつぐ〳〵感じさせて貰うて居る事は、此の善惡の凡夫といふことを、親鸞聖人がやかましくお示し下されてあることである。我々の善惡は、善も惡も皆因果業報で、我々は善と言へば、之をよいと思ひ、惡と言へば惡いと思ふのであるけれども、親鸞聖人の仰せより頂けば、之れが全く間違ひなのである。殊に善導大師の御言葉の中に、夫れが示されてある。曰く

一切善惡の凡夫、生を得る者は、皆な阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣と爲さゞるは莫き也。

善も惡も皆な共に、助かるは此の遣る瀨無き願力に乘じて助かるのである、との御言葉である。そこは我々平生『歎異鈔』を頂き、罪惡の者をとの御敎化ばかり見て居るもの故、罪惡を主に思ひ、善に就きては左程にも思ふて居らぬのであるが、親鸞聖人の書き物を拜見すると、善を哀れむとのお示しも澤山あるのである。聖人の思召にすれば、善も惡もおなじなのである。今『正信偈』の御言葉で頂けば、

定散と逆惡とを矜哀して、光明名號因緣を顯はす。云々。

又

一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば云々。

また

本師源空佛敎を明らかにし、善惡の凡夫人を憐愍して、眞宗の敎證を片州に興し云々。

斯く善を哀れむとのお示しは何うか、といふに、我々は日と無く夜と無く、凡夫相對の善を振り廻はし、其の爲めに苦しんで居るのである。我々は「人が善くした」と言ひては煩惱を起し「自分も善く仕なければ濟まぬ」と煩惱を起し、「おれは人に善くしたのだが」と煩惱を起し、斯く善につけても、矢張り煩惱を起し、苦しんで居るのである。『歎異鈔』の十三章には

よきこゝろのおこるも善業のもよほすゆへなり。惡事のお

もはれせらるゝも、惡業のはからふゆへなり。云々。

善惡業報と言ふ時は、何か宿命論のやうに聞こえるも、我々が皆な斯く、善惡の二つに繫がれて苦しんで居る、之が皆な業報である。斯く我々は善に就け惡につけ、煩惱の止まぬ善惡の凡夫である。否な聖人より言ふ時は、

大小の聖人重輕の惡人、皆な同じく齊しく、選擇大寶海に歸して念佛成佛すべし。(行卷)

善惡の凡夫のみならず、大小の聖人と雖、此の如來の慈悲て無ければ助かるといふ事は無いのである。等覺の彌勒菩薩と雖、自分の善をたよりにして、成佛なされるといふ事は書かれて無い。皆な此の一切の善惡の凡夫、其の者を見捨て給はざる、實に絶對の慈悲て往かれるのてある。故に我々、善を仕なければならぬなど言ふて居るのてあるも、此の眞のお慈悲を頂くと、抑々我々、善が出來るなどゝ思ふて居るのが大間違ひ、本來我々に善など言ふべきものが一切無いのてある。成る程凡夫善惡の善は有ることは有るも、夫れは凡夫相對の善にして、佛の絶對の善て無い。『歎異鈔』の中には、

如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめ云々。

其の善も惡も仕樣の無き私の根性の底の底迄知り拔き、其の地獄の底に燒げつく可き私の上に大悲の遣る瀨無き手が及んて、其の者を浮かばせて下さるのてあります。『和讃』には、

彌陀智願の廣海に、　凡夫善惡の心水も、

歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。

即ち、此の遣る瀨無きお慈悲は何うかといふに、彌々之を頂く一念に、彌陀智願の廣海の中に、今迄の其凡夫善惡の心がひるがへり大悲心と轉じ變つて下れるのてある。即ち「我々今日迄善と思ひ惡と思ひ居りしは、皆な間違ひてあつた、夫をば知り拔き、其者をばお見捨て無きお慈悲てありしか」と彌々此のお慈悲を頂く一念に、如何なる物ても動かせぬ大盤石の大安心が、此廣大のお慈悲の上に築き上げられるのてある。先き程より申すが如く、佛の大悲は我々の淺間しき根性の底の底迄お見拔き下された上のお慈悲なれば、私の心配するよりも、大悲のお手許の方がいつも先き廻はりをして下される。そこは實に人智洞達て、いつも先きへ〳〵と廻はりて下されるもの故、我々は何事の心に懸る無く、自分の有りの儘を打ち出して、喜ばせて貰へるのてある。茲は實に大事の處て我々をお慈悲を頂くは、我々の善し惡しを其儘置いて信ずるに非ず、善きも惡きも其儘皆投げ出して、大悲の中に沒入せさて頂くのてある。故に心の樂な事を言へば、これ程樂のことは無く、其代はり一面非常に嚴そかて、決して浮き立つ事は出來ぬのてある。人生何が嚴そかと言つても、此吾が身の惡しさが知れた程おごそかな事は無く、此の我が身の惡しさの段になると、設ひ天下を擧げて我を地獄に蹴り落すとも更に不足を言ふ可きことは無いのてある。斯く一文の價値無き自分を、又人が何程褒めて呉れた處て、夫れがどれ丈けの値打ちか。實に斯く他力のお慈悲の上て、安心させて頂いた事程、樂な事は無く、又これ程眞面目なことは無いのてあります。

十二

之れは後に申す積りてありましたけれども、此の度び一ケ月程前より此の學舍講話に列なるを何よりの樂みとして、醫學の講習を兼ね、石見の國より態々上京せられてありました中村氏と申す御方が、しばらく前より當地て發病せられ、昨夜大學病院に於て遂に亡くなられました。御遺骸を今日此の學舍にお迎へする手筈に相成り居り、詳しき事は後に追吊を兼ね席を改めて申上げやうと思ひます。が其の中村さんが昨日彌々最後の大手術を受けられやうとする時、今迄腕に捲いて離されなかつた念珠を私に渡し、先生々々と私を呼ばれる。私は「何事も佛樣にお任かせなさい」と申しつゝ、其後數刻を經て遂に亡くなられたのてありますが、實に此の時私は「自身は是れ煩惱を具足する凡夫……火宅を出ずと深信す」「今彌陀の本弘誓願は……信知して一念に至るに及ぶまて疑心有ること無し。」——此の二種深信の樣を、明らかに面の當り見せて頂いたのてある。「あぶない」といふは、何故あぶないかといふに、充分落ちる處迄落ちて居無いから、危いのてある。底迄落ちて居れば危いといふ事は無い。落ちる丈け落ちて居れば、落ちる危なげは無くなつて仕舞ふのてある。今我々が、設ひ助からうが助かるまいが、此地獄の底迄落ち切りたる自分を、他迄見捨てぬとの仰せなれば、實に是れ超世無上の御本願てある。若し當り前に、善き事を仕た者は善くなり、惡しき者は惡しくなるとの敎へなれば、超世無上とは言はれぬ。如何なる修行でも、如何なる敎法でも、遂に仕て見よう無き此の五逆十惡の迄も助からぬ私、おやによりて彌々其の者が可哀相てあるとの仰せなればこそ、超世てある、無上てある。

『大經』には宣はく、

必ず超絶して去ることを得て、安樂國に往生して橫に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ

と。斯くの如く段々頂く時は、實に吾が身の淺間しき事は筆にも言葉にも申さんやうは無いのてあります。

十三

次に御文に戻りて、「其れ彼の彌陀佛の名號を聞くことを得ること有つて、歡喜して一心を至せば、皆當にかしこに生ずることを得べし」——之は先程申した「十方諸有の衆生は、阿彌陀至德のみ名をきゝ、眞實信心いたりなば、おほきに所聞を慶喜せん」の『和讃』てあります。我々南無阿彌陀佛の親のみ名を聞き、廣大の大悲の佛のましますことを聞かせて貰らふて喜ばせて貰ふ。——抑々南無阿彌陀佛の親の名前は何てあるか。「賴むものを助ける」「助からぬものを助ける」との大悲の仰せてある。蓮如上人八十通の『御文』は、至る所此の南無阿彌陀佛の講釋ばかりてある。之を南無阿彌陀佛の字の講釋と思ふたら、大間違ひてある。南無阿彌陀佛とは助からぬ者を助け給はるお方とより外に、言ひやうが無いのてある。阿彌陀佛とは、十方衆生が迄も助からぬ者故、其の助らぬ者を助け度いと、其の遣る瀨無きお心より正覺を御成就下されしお姿なれば、南無阿彌陀佛の六字は、助からぬ者を、助け給ふお姿とより外に、言ひやうが無い。之れは實に尊きことに

て、『正信偈』では眞最初に、

無量壽如來に歸命したてまつり、不可思議光に南無したてまつる。云云。

私は以前蓮如上人の『御文』を、南無阿彌陀佛の字の講釋と思ふた爲め、思召のほどが少しも頂け無つた。南無阿彌陀佛の名號は、斯く三界に一點の據り所も無く、迚も助からぬ者を助け度いとある、佛のお心の儘が南無阿彌陀佛なのである。

『和讃』には

十方微塵世界の、　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてざれば、　阿彌陀となづけたてまつる。

阿彌陀佛とは、十方微塵世界の衆生、其の廣大の名號を聞き一念歸命する處で、其者を凡て捨て給はぬ佛であるとのお示しである。其の佛の廣大の名號を聞かせて貰ふて見れば、何人も信心歡喜乃至一念して、皆な當にかしこに生ずることを得べし。玆て信心歡喜に力を入れてはならぬのである。南無阿彌陀佛のお慈悲の廣大なることを聞かせて貰へば、何人も信心頂かずには居られぬのである。唯廣大の御念佛を有難く頂くのみであります。

十四

次に、

往生要集ニ云々。入法界品ニ言ク、譬ヘ如下有レ人得レバ不可壞藥ヲ一切ノ怨敵、不レ得レ其ノ便リヲ。菩薩摩訶薩亦復如レ是、得レバ菩提心不可壞ノ法藥ヲ、一切ノ煩惱諸魔怨敵、所レ不レ能レ壞コト。譬ヘ如下有レ人得住水寶珠ヲ、瓔珞其ノ身ニ、入リ深キ水中ニ而テ不レ沒ルガ溺ヤ。得レバ菩提心住水寶珠ヲ、入リ生死海ニ而テ不ズ沉沒セ。譬ヘ如下金剛ハ於テ百千劫ニ處レ於テ水中ニ而シテ爛壞シ亦無キガ異變。菩提之心モ亦復如レ是、於テ無量劫ニ處ルニ生死中諸ノ煩惱業ニ、不ズ能ニ斷滅スルコト、亦無シ損減ニ上已

之は今の眞實如來のお慈悲の徹到した、深信即ち眞實信心絶對の有樣を、源信和尚の『往生要集』の御文によりて、お示し下されたのであります。『入法界品』といふは『華嚴經』の中に段々と廣大なる華嚴藏界の有樣が說かれてありて、最後に其の法界に入るには、西方彌陀の念佛を以てすると說いてある處が『華嚴經』の『入法界品』である。其處の文をば源信和尚が『往生要集』の中に引かれてあり、夫をば玆にお引きなされたのであります。親鸞聖人は凡て細かな事は言はれ無い。『華嚴經』を御覽なさるにしても、『華嚴經』の根本として說かれてある、華嚴淨土の蓮華藏界の有樣を、直ちに彌陀の極樂のことゝ解し、其の蓮華藏界より多くの菩薩が顯はれて法を說かるゝは、即ち還相廻向のことであると御覽なされたのである。又『涅槃經』にしても、『涅槃經』に說かれてある涅槃の味ひは、即ち我々が往生させて頂く極樂無爲涅槃界のことであると御覽なされたのである。即ち親鸞聖人の眼から御覽下さると、『華嚴經』でも『涅槃經』でも、悉く絶對他力のお慈悲の

上より、往還二種廻向をお說き下されたものに外なくなつて仕舞ふのである。親鸞聖人は、凡て斯く何もかも皆な絶對的である。例へば『御文』で拜讀しても

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人ももたず、とこそおほせられ候ひつれ。そのゆゑは如來の敎法を十方衆生にとき、きかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の敎法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。云々。

親鸞は弟子一人も待たぬ、其の故は如來の敎法を十方衆生に弘通して居るのであるから、如來の御代官を申して居るばかりである、と實に無雜作に、思ひ切つたことを仰せられてあるのである。聖人の調子はいつも斯うなのであります。

十五

さて「譬へば人有つて不可壞の藥を得れば、一切の怨敵其の便りを得ざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、菩提心不可壞の法藥を得れば、一切の煩惱諸魔怨敵、壞ること能はざる所なり」——玆に菩提心とあるは、淨土の大菩提心のことである。淨土の大菩提心、不退の法藥といふは、即ち今の南無阿彌陀佛の六字であります。此の南無阿彌陀佛の廣大なるお惠みを頂く時は、不可壞の靈藥を有する者に對し、一切の怨敵其の便りを得ぬ如く、一切の煩惱諸魔怨敵、此者に對し破ることが出來ぬとのお示しである。又次に「譬へば人有つて住水寶珠を得て其の身の瓔珞とすれば、深き水中に入りて沒溺せざるが如し。菩提心住水寶殊を得れば、生死海に入りて沈沒せず」。——住水寶といふ貴き寶玉を得て、身の飾りと仕て居れば、如何なる深水中に入るも決して溺ること無き如く、此の南無阿彌陀佛の廣大なる寶殊を頂くなり、どのやうな生死海中に漂ふも、決して溺れること無いとの御文である。又「譬へば金剛は百千劫に於て水中に處し、爛壞し亦異變無きが如し。菩提心も亦復是の如し無量劫に於て生死中、諸の煩惱業に處するに斷滅すること能はず、又損減無し」で——金剛は百千萬劫水中に在るも、腐り變はること無き如く、此の佛のお心を頂いた眞實信心も、金剛堅固にして無量劫中生死海に沈沒し、煩惱業中に在るも、決して腐れ滅ぶるといふ事は無い。斯く如來回向の南無阿彌陀佛の淨土の大菩提心は、何物にも支へられず、如何なる事に遇はふと、一點の危な氣も無き絶對のものであるとのお示してあります。

十六

處で此菩提心につき思ひ出したは、法然聖人と親鸞聖人との間が、常に消極と積極とになつてある事である。法然聖人は常に消極的にお示し下され、親鸞聖人はいつも夫れを積極的にお示し下されてあるのである。設へば此の發菩提心に就きても、法然聖人は『選擇集』に、唯南無阿彌陀佛の一道である、此方から菩提心を發すなどいふ事は無い、と菩提心を捨てゝ仕舞ひ、唯一向專念無量壽佛であるとお敎へ下されたが法然聖人の御敎化である。申す迄も無く此の時は、上求菩提下化衆生の自力聖道の菩提心の意味で。其意味では彌陀の本

願には菩提心が無いとお示し下されたが法然聖人である。處が從來の佛法では此の發菩提心が第一の條件となつて居るので、菩提心が無いなどゝ言ふものは、まるで佛法で無い。現に一世の碩學梅尾の明惠上人は、之を見て菩提心を捨つる如きものは佛法に非ず、惡魔の法であるとて、法然聖人を罵られた。夫れ程迄に法然聖人は消極的にお示し下されたのである。處が夫れが親鸞聖人になると、大積極になつて來て信の一念に於て、淨土の大菩提心を賜はるのであるとなつて來たのである。『和讃』で申せば

自力聖道の菩提心、　こゝろもことばもおよばれず、
常沒流轉の凡愚は、　いかでか發起せしむべき。
三恒河沙の諸佛の、　出世のみもとにありしとき、
大菩提心をこせども、　自力かなはで流轉せり。

斯く自力の菩提心の起せぬ者故、其者にこの度びは佛より淨土の大菩提心を賜はるのであると、此度びは親鸞聖人の御敎化はひつくり反つて來たのである。『和讃』では

淨土の大菩提心は、　願作佛心をすゝめしむ、
すなはち願作佛心を、　度衆生心となづけたり。

又『選擇集』の中には、一切經を六度迄通讀なされた法然聖人が三部經以外、他の御經は一ヶ所も引かれて無いのに、親鸞聖人にすると、『敎行信證』の中に『華經經』『涅槃經』を初めとして、有らゆる御經が皆な入れてある。之は何か。唯南無阿彌陀佛のお慈悲一つで助かるのである、余の物でゆける我々なら、佛は夫れ程迄にして御本願をお建て下さらぬと、法然聖人は余のものを一切お捨て下されたのであるが、親鸞聖人になると、其の『華嚴經』も、『涅槃經』も、乃至一切の經が、皆な此本願念佛の惠み一つをお說き下されたものであると、凡てをお味ひ下されたのであります。

十七

次は

又云。我亦在彼、攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無倦、常照我身。

有名なる、源信和尙『往生要集』の御文であります。今程申した水にも溺れず、煩惱にも犯されぬ金剛堅固の信なるは、此の廣大なる攝取不捨のお惠みがましますからである。之は先き程申した中村さんの御病氣の場合にも、私は始終病院に行き、「佛樣が兼ねて護つて居て下さるのだから、大悲の中に安心して療治を仕てお貰ひなさい」と申した。療治の結果、或は自分は知ぬかも知れぬ。けれども「我も亦彼の攝取の中に在り、煩惱眼を障て見たてまつらずと雖、大悲倦きことなくて常に吾が身を照らしたまふ」である。『歎異鈔』九章で頂けば、

淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。

又

天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにていよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり、よろこぶべきこゝろをさへてよろこばせざるは、煩惱の所爲なり。

煩惱の爲め、喜ぶ可き事が喜ばれず、直さ〳〵お光りを見奉る事が出來ぬけれども、大悲倦きことなくて、遣る瀨無きお慈悲は常に此の身を照して下さるのである。成る程死ぬかと思へば心淋しけれど、其の心のどん底は常に尊きお慈悲に包まれ、どうならうと、斯うならうと見捨て給はぬ御慈悲一つにお任かせして、安心して居らせて貰へるのである。茲はどれ丈け言ひても、言ひ足りの無い處であります。

十八

さて茲で次ぎに聖人御自釋の結びの御言葉があります。

爾者若行若信、無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就非無因他因有也可知。

茲は『行』『信』兩卷の結びの御言葉として、大切なる處であります。『行』といふは、佛が我々罪深き者を、助けるが爲めに、南無阿彌陀佛の一法をお建て下されたが『行』である。『信』といふは、其の南無阿彌陀佛を頂いて、信じた處が『信』である、佛の遣る瀨無き思召の儘が南無阿彌陀佛と現はれたが行てあり、其の佛の思召の有き切りを頂いた信心が信である。其の行も信も、『若しは行若しは信一事として阿彌陀如來の淸淨願心の、回向成就したまふ所に、非ること有ること無し』――其の南無阿彌陀佛の名號も、其の遣る瀨無き思召の屆きて頂く信心も、一つとして大悲の淸淨願心より、此方に屆けて頂かせて下されるもので無いものは無い、皆な遣る瀨無き願心より此方に差向け、與へて下さるのであるとの御示してあります。之は昨年度講本に申した『信卷別序』の御文にも、

夫れ以みれば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり

我々がお慈悲を喜び、信心を得させて貰へるのは、佛の親より、何うかして此の我が親心を屆けねばならぬ、何うかして其の淺間しき者を救はねばならぬ、何うか此の我が心を知りて呉れ、此の我が思ひが屆いて呉れと、常に此の遣る瀨無き願心をもて、私の方に向ひ詰めに仕てゝ下されてある。故に我々の方にまこと心は一つも無けれども、其のまことて無い夫れが見捨てられぬのが我が大悲のまことである、如何にも其のまことて無いのが、可哀相て見て居られぬのであると、此遣る瀨無き仰せを聞かせて貰うて見れば、如何なまことならぬ我々もあゝ有難いと之を頂かずには居られぬのである。之れが「若しは行若しは信、一事として如來淸淨願心の回向成就したまふ所に非ること有ること無し」である。「因無くして、他の因有るには非る也」――斯く佛の遣る瀨無き思召がまします一つで頂けるのであつて、外に因が有るのても無ければ、又偶然因無くして頂けるのても無い。斯くの如き廣大の親心がましませばこそ、此の淺間しき私の心に遂に徹到して下さるのであります。

猶ほ此の御言葉を手初めとして、同樣の御言葉が、『證卷』の中には

若しは因、若しは果、一事として阿彌陀如來の淸淨願心の廻向成就したまふ所に非ざること有ること無し。因淨なるが故に、果また淨なり。知る可し。

『略文類』の中には、

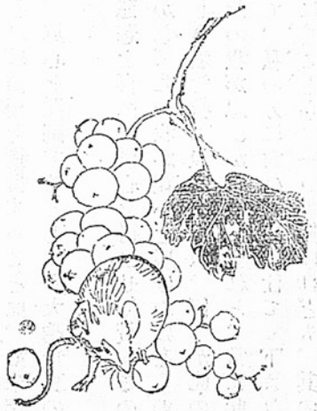
若しは往、若しは還、一事として如來淸願心の廻向成就したまふ所に非ざること有ること無し。

と。聖人の止め言葉はいつも是れである。何から何迄、皆な御見捨て無きお慈悲の上より、廻向成就して私に賜はるのが、如來廣大の親心てのる。我々の頂かせて貰ふ念佛も、信心も皆な此の大悲よりの賜り物でなのであります。

以上今日は主として機法二種深信に就き、御話申したのである。足らざる處は次席に補はうと思ひます。

十九

猶ほ最後に一言御注意申して措く事がある。夫れは、若し皆樣の中にて、自分に一點でも善き事が出來ると思ふ方があらば、之は余程くせものとお思ひなさらなければならぬのである。之は如何にもひどい申やうのやうてありますも、成る程我々一寸人に親切が出來、善い事が出來るは出來るも、之は本ものて無い、唯人生の善し惡しの善に過ぎぬのてある。一分一厘でも、自分に善い事と言つては出來無いと知れた時が、本當にお慈悲の聞こえて下された時なのてある。又其の代はり、一分一厘ても自分の惡しさが氣に懸り、心に障る處が有つたら、未だお慈悲が頂けたので無いのてある。如何に自分が惡しくても、眞のお慈悲を頂いた上からは、毫髮も疑蓋雜る事無し。又天下悉くに施すとも、慈悲をして善い事をしたといふ事は無いのてある。唯此の廣大のお慈悲の上より眺め、遣る瀨無き願力の下に、此吾が身の淺間しきを捨てさせ給はぬ御惠を喜び〳〵、御恩報謝の仕事をさせて頂くのが何より有難いと思ひます。（七月一日夏季求道會第一日）



告白

我を知るものは唯此の御一人なり

寺田榮之丞

回顧すれば昨年の夏丁度今時分てあつた。誠に不思議な御緣で近角師の御高敎を受くる機會を得た。思へば思ふ程不思議てたまらん。自分は其日午後六時頃てあつた。陸上に散步を試みるべく船から上陸したのてある。海軍橋を渡て右に折れ樣とすると、不圖目に付いたのが講話の評題てあつた。人生と信仰、信仰と人生、に就て近角師妙法寺に於て午後七時より云々の揭示てある。自分は學校時代から信仰の餘瀝の著者として近角師を慕つて居る。一度は師の謦咳に接したいとの希望を有つて居たものだから、此暑さ盛りに人混みの中、嘸暑からうとは思ふたが、一度聞て見たいとの考へて、步を妙法寺に運んだ。行つて見ると名にし負ふ安藝門徒が非常な參詣てあつた。就中感心なのは靑年者が多かつた事てある。最も今回は當地佛敎靑年會の催しに係る譯ではあつたが、參詣者の大多數は靑年の士て、堂に溢れる位の盛況てあつた。自分も靑年の一人てある。丁度都合が好い、定めて喜んて呉れるだらう位て、講話を聞く段になつた。自分は軍服を着て居るし、餘り人目に立つのも如何と思つて、右隅の大黑柱の陰に座を占めた。隣には高念佛の中老人が居る。前には有難屋の御婆さんも居た。偶まに軍服を着けた下士や水兵も見受けた。此輩感心な心懸だと思つて居た。高念佛の御蔭て自分も念佛を唱へたくなつた。低聲で心に念佛した。時刻は來て初めて近角師を見るの機會を得た。成程こんな方かなと思ひつゝ、先づ第一言を聞くべく耳を傾けた。

扨て皆さんとの切出しで？絮々縷々幾百千言、人生と信仰信仰と人生と云ふ題て說き出された。自分は其頃、實は平素から人生問題に付煩悶迄には至らぬが、誠に腑に落ち兼ねた事があつた。夫れは自分を知らぬ人の多い世間だとの念てあつた。『士は己れを知る者の爲めに死す』之れが自分の唯一の理想て、實に渴望して居るに係らず、どうも上と下と共に人を誤解して居る。城壁を設けて人を取扱ふのが不愉快で堪らなく感じて居たのてある。

然るに何と云ふ有難い因緣か。其夜の御話は總て自分一人の爲めに說かるゝ樣に聞かれた。自分は平生の此蟠りに就て、痒きに手の屆く程の解說を得た、實に嬉しかつた。不識間に頭を得搔けずなつた。橫着な自分が眼には止め度なき涙の滝が流れた。隣近所に恥しいとも思つたが、如何にしても涙が止まらぬ、能くこんなに泣けるものだと思つた。他人の手前は恥かしい乍らも、心には實に云ふべからざる慰藉を感じた。とう〳〵頭を搔げぬ間に其晩の講話は濟んで仕舞つた。やれ丁度の處に思足らぬ事だと惜しかつた。人は皆な最後の禮拜を終つて立ち上がる。自分は如何にも立ち兼ねた。もつと聞いて今夜は存分に涙が流したく感じた。どうも行く氣にならぬ。

終りまでうろ〳〵迂路付いて居たが、他にも尙ほ殘つて內座に參する方も有る模樣である。之れは得たり、今夜は徹宵師を煩はしてゞも此の涙を皆な流さんと決心した。青年會員の某氏に賴んで師に謁する事を得た。唯だまだ〳〵聞きたかつたのである。師は懇ろに自分の心ばえを尋ねて呉れられた。併し自分は何も謂はれぬが、云はれぬ或物の爲めに非常に感激して、今夜は狂氣じみて涙が溢れる計りで、願ふ所はまだ〳〵聞きたいのみであつた。

師は自分の心を讀んで呉れられた。只だ有難い〳〵の一點張りで、餘り多くを聞くを得なかつたが、自分は其夜からとう〳〵有難くなつて仕舞つた。

噫自分を見て知つて呉れる人は、生みの親と此方のみであつた。人間の悲しさには生みの親ですら或程度迄しか手が屆かぬ。又屆かせたくも其柄でないのである。誠に尤もな事である。然るにどうして此方のみは斯んなに能く心の底迄て御見拔きであろうかと思ふと、又涙が湧き出す。同時に云ひ知らず勇氣付いて感じた。夫れは何んだつまらない、人間位が何んと思はふが大した事ではない、我れを知るものは唯此御一人なり、即ち一佛である、此智惠圓滿の大偉人に知られ乍ら、今迄は何の事だ馬鹿〳〵しい、僅かに馬の眼にも如かざる人間の細い眼で、人の心中迄奇麗に見拔て貰はふと掛つたのが大變な間違であつたとの念であつた。又無理も無い事である。人間であるからとの念も起つて、今迄恨めしく思つた事が却て氣の毒にもなつて來た。

其晩は徹宵するに及ばなんだ。十二時を過ぎてから船に歸つた。途すがら念佛と二人連れて歩いた。心がすが〳〵する。千金の賜にも勝して心が愉快である。海軍橋の側に來ると、畫間の掲示が何物かを囁く如く思はれた。思へば〳〵不思議でたまらん、今夜は何たる吉日ぞ、有象無象の我輩を此橋を渡ると同時に拉し去つて、妙法寺に至らしめた。神妙に佛の御前に跪つかしめた。思ひも寄らぬ涙を注がしめた。遂に廣大なる或物を認めさして貰つた。如何に考へても只事ではない。明日が日に何か出來事でも起らねば宜いと思ふた。棧橋に着いて通船に乘り漕ぎ出したとき、夜の寂寞を破つて涯岸に激する浪を見て、一層の尊敬の念と有難さを感じた。夫れは其翌日御笑草に師の下に呈した拙ない次の一首である。

和田津海の波のよるひるしげゝれば
千引の岩も溶けてあらあや

廿有餘年が間、否な承はれば無始より以來だそうだ。一日も絶間なき御心遣ひを今日やつと氣付かして貰ひ、御氣の毒とも何とも申樣がない。斯かる愚鈍のものなればこそ、御心配も一通りやそこらで無かつて筈である。何たる因緣そや、難有事には御手強き力で、とう〳〵引寄せて戴いたのである。誠に〳〵廣大なる御慈悲である。無限の御力である。此御力で捉まつたらどんなに藻掻いても到底逃げられる氣遣ひはない。又どんなに逃け廻つても終には一度は此御手に捉へらるゝ時機が來るとは明かである。皆々もう今から大安心をして居て差支はない事と思ふのである。嗚呼　煩惱障眼雖不見、我亦在彼攝取中、歟。南無阿彌陀佛〳〵。

近角常觀著

信仰問題

第六版　菊版二百頁以上　代價一冊六拾五錢　郵稅六錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかとは二十世紀の問題也、本書內篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也。內篇には內的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗敎の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を敍するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の淸懷に悟融するの想あらしむ。外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を世に實現せんとする者、歐米各國の宗敎界及び社會事業を紹介し、鑢て佛敎原初の眞精神を說き、將來淸新にして且つ健全なる社會的經營を鼓舞し來る、繙く者をして感激奮起せしむるものあり。本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書鑢譯室、佛國宗敎歷史大會の寫眞石版圖を揭け、附錄として著者洋行中の通信及び旅行記を收む。趣味津々聊か讀者を慰むるに足らむか。

懺悔錄

附錄『歎異鈔』

第七版　定價二十錢　郵稅貳錢

袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に醞積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

發行所　本郷區春木町三丁目廿一番地　振替東京一二八九　森江書店

申込所　本郷區森川町一番地　振替東京一六六九六　求道發行所

清澤滿之師序　近角常觀著

信仰之餘歷

第十二版

定價　冊　錢
郵税　四　錢
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黑界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時。自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら內心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絕ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

信仰之餘瀝要畧

第三版

部數に應じ充分割引す

定價五錢
郵税二錢
但し三冊郵税二錢
施本用冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に、『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

右二書久しく品切の處本月末出來す。

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

近角常觀編著書目

人生と信仰　三版　定價冊錢　郵税四錢　袖珍本

親鸞聖人の信仰　參版　定價七十錢　郵税八錢　クロース綴

冠頭　唯信鈔文意　新版　定價七錢　郵税二冊迄二錢　施本用

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

近角常觀序　鈴木龍司著

入信之徑路　定價冊錢　郵税四錢

求道昨年度分合本　定價七十五錢　郵税八錢

申込所　東京市本郷區森川町一　振替東京一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回二十日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一冊に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

大正元年九月十七日印刷
大正元年九月二十日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)
大賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂

前號要目

求道

◎感謝の紀念　原　基

◎親ごころ　堀　勇吉

講話

◎大信海　一老人

雜錄

◎歸命の一念　近角常觀

告白

◎處女操行の淵源　近角常觀

時報

◎懺悔　さかえ

◎第二回夏季求道會